

平安京左京六条二坊十一町跡 烏丸綾小路遺跡発掘調査報告書

2 0 1 9

株式会社 文化財サービス

例 言

- 1 本書は、京都市下京区醒ヶ井泉水町 134 番地 2・5・6 他 10 筆で実施した、平安京左京六条二坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡の発掘調査成果報告書である。(京都市番号 18H465)
- 2 調査は、宿泊施設建設に伴い実施した。
- 3 現地調査は、平安埋蔵文化財事務所株式会社より株式会社文化財サービス(以下、「文化財サービス」という)に委託され、辻 純一、辰巳陽一(文化財サービス)が担当した。
- 4 調査期間は令和元年 7 月 1 日～8 月 30 日である。
- 5 調査面積は 323 m²である。
- 6 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高は T.P.(東京湾平均海面高度)である。
- 7 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 8 本書の執筆は辰巳が行い、編集は辰巳、野地ますみ(文化財サービス)が行った。
- 9 現地での記録写真撮影、出土遺物の撮影は辰巳が行った。
- 10 調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 11 発掘調査および整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕 廣瀬八郎、田邊貴教、田中慎一、吉岡創平(以上、文化財サービス)、
作業員(株式会社京カンリ)

〔整理作業〕 望月麻佑、米倉美穂、多賀摩耶、古谷眞由美、野地ますみ、上野恵己、
甲田春奈、本間愛子、内牧明彦(以上、文化財サービス)
- 12 自然化学分析(岩石鑑定)については、公益財団法人益富地学会館に依頼した。
- 13 出土遺物の年代観は以下の文献に依った。

小森俊寛 「京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、
7～19 世紀－」 京都編集工房 2005 年

中世土器研究会編 「概説 中世の土器・陶磁器」 真陽社
- 14 現地調査、整理作業において、下記の方から御教示をいただいた。記して感謝いたします。

(敬称略)

國下多美樹(龍谷大学)、浜中邦弘(同志社大学歴史資料館)、鈴木久男(京都産業大学)

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 測量基準点の設置と地区割り	3
4 整理作業・報告書作成	3

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境	5
2 既往の調査	6

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序	9
2 検出遺構	9
(1) 第1面	12
(2) 第2面	14
(3) 第3面	16
(4) 拡張区	19
3 出土遺物	19
(1) 第1面遺構出土遺物	19
(2) 第1層出土遺物	21
(3) 第2面遺構出土遺物	22
(4) 第2層出土遺物	22
(5) 第3面遺構出土遺物	24
(6) 拡張区遺構出土遺物	28

第Ⅳ章 まとめ

1 池0052について	31
2 池0052の所有者について	31
3 遺構の変遷	33

附章 自然科学分析

1 池0052出土岩石薄片の偏光顕微鏡による観察結果報告	37
------------------------------	----

図版目次

図版 1	遺構	1. 調査地全景（上が北）	2. 第 1 面完掘状況（西から）	
図版 2	遺構	1. 第 2 面完掘状況（西から）	2. 第 3 面完掘状況（西から）	
図版 3	遺構	1. 池 0052 景石検出状況（北東から）	2. 拡張区壕 0051 完掘状況（北から）	
図版 4	遺物	1. 第 2 層出土瓦経	2. 池 0052 出土木製品	3. 池 0052 出土銭貨
図版 5	遺物	1. 土坑 0045 出土遺物	2. 池 0052 出土遺物	

挿図目次

図 1	調査位置図（1：2,500）	1
図 2	調査経過写真	2
図 3	調査区地区割り図（1：150）	4
図 4	中古京師内外地図	5
図 5	中昔京師地図	5
図 6	改正 京町御絵図細見大成	5
図 7	既往調査位置図（1：5,000）	7
図 8	調査区・拡張区南壁土層断面図（1：80）	10
図 9	調査区東壁・拡張区西壁土層断面図（1：80）	11
図 10	調査区中央セクション土層断面図（1：80）	12
図 11	第 1 面調査区全体平面図（1：120）	13
図 12	第 2 面調査区全体平面図（1：120）	15
図 13	第 3 面調査区全体平面図（1：120）	17
図 14	遺物 1（1：4）	29
図 15	遺物 2（1：4、1：1）	30
図 16	偏光顕微鏡写真 1	38
図 17	偏光顕微鏡写真 2	39

表目次

表 1	遺構概要表	9
表 2	遺物概要表	19
表 3	遺物観察表	35

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯（図1）

京都府京都市下京区醒ヶ井泉水町134番地2・5・6その他10筆において、宿泊施設の建設が計画された。建設予定地は平安京左京六条二坊十一町跡および烏丸綾小路遺跡の範囲内にあたる。そのため、建設工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）による試掘調査が実施された。その結果、中世の遺構および遺物の存在が確認され、発掘調査を実施することとなった。調査は、平安埋蔵文化財事務所株式会社から株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託された。

2 調査の経過（図2）

発掘調査は7月1日から現地作業に着手し、8月30日にて全ての工程を完了した。調査区は、文化財保護課の指導により東西21.0m、南北15.0m、面積は315.0㎡に設定した。また、本調査区の調査を完了後、西辺の一部を拡張した。拡張区は東西4.0m、南北2.0m、面積は8.0㎡である。

近現代整地土および近世整地土を重機掘削によって除去し、その後、人力によって第1面の精査および遺構検出を行った。その結果、東西方向の溝状遺構数条、土坑数基を検出したが、埋土に包含されていた遺物から、これらの遺構は江戸時代に属するものと考えられる。また、中世以前の遺構は検出されなかった。これらの遺構を人力にて掘削後、記録作業を実施した。次に、人力によって第1面の遺構ベース層を掘削、除去し、第2面の精査、遺構検出を行い、土坑状の遺



図1 調査位置図（1：2,500）



1.調査前（北東から）



2.重機掘削（北西から）



3.掘削土搬出作業（北から）



4.池0052掘削作業1（西から）



5.池0052掘削作業2（北西から）



6.残土搬入作業（北東から）



7.埋戻し作業（北東から）



8.調査完了後（北西から）

図2 調査経過写真

構を数基検出した。これらを人力にて掘削後、記録作業を実施した。その後、第2面の遺構ベース層を掘削、除去し、第3面の精査、遺構検出を行ったところ、室町時代の苑池を検出した。人力にて池埋土を掘削後、写真撮影および図面作成による記録作業を行った。本調査区を埋め戻し後、拡張区の調査を実施した。

拡張区は、本調査区の南北中央よりやや南寄りで、西辺に接するように設定した。近現代整地土を重機掘削によって除去し、近世整地土を人力によって掘削、除去したところ、第1層および第2層は確認されず東端部で基盤層が露出した。この基盤層上面で、精査および遺構検出を実施したところ、南北方向の壕を検出した。当遺構を掘削後、写真撮影および図面作成による記録作業を行った。記録作業が完了した後、拡張区を埋め戻し、資機材を撤収して現地作業を終了した。

なお、写真撮影機材は、35 mmフルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35 mm白黒フィルムおよびカラーリバーサルフィルムを使用し、図面作成には手測りによる実測、トータルステーションによる図化、写真測量を併用した。

現地調査においては、適宜、文化財保護課の臨検および指導を受けた。また、遺構検出段階および掘削段階において、本調査の検証委員である龍谷大学教授國下多美樹氏、同志社大学歴史資料館准教授浜中邦弘氏の現地視察・検証を受け、調査に対する助言を頂いた。

3 測量基準点の設置と地区割り（図3）

測量基準点は、VRS測量により調査地敷地内にK.2、K.3を設置し、その2点からトータルステーションによりK.1、K.4を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

K.1	X = -111408.160 m	Y = -22538.083 m	H = 30.290 m
K.2	X = -111398.639 m	Y = -22534.308 m	H = 30.194 m
K.3	X = -111405.044 m	Y = -22573.134 m	H = 30.354 m
K.4	X = -111391.634 m	Y = -22557.375 m	H = 30.592 m

検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して3 m四方のグリッドを設定した。Y軸にアルファベットを西から東に、X軸にアラビア数字を北から南に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。地区名は、グリッドの北西角を基準とした。

4 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業および報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った。報告書の執筆は調査を担当した辰巳陽一、編集作業は野地ますみが担当し、その他整理作業は当社社員が分担して行った。

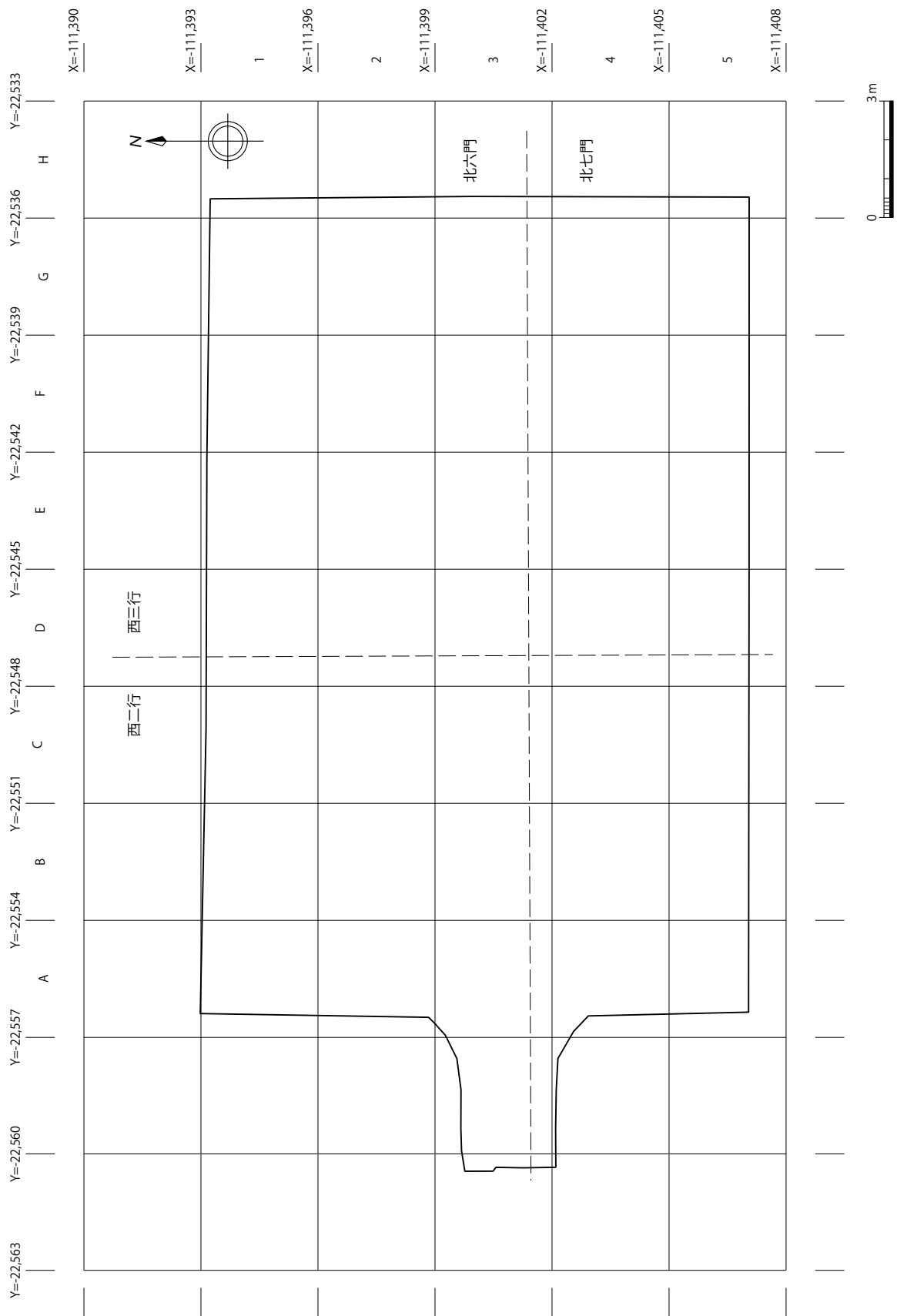


図3 調査区地区割り図 (1 : 150)

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境（図4～6）

調査地は平安京の条坊では左京六条二坊十一町内に相当する。左京六条二坊の状況は不明な点が多いが、平安時代中期以降になると文献上の記載が見られるようになる。十六町に現在も鎮座している五条天神社は、同社社伝では平安建都の際に弘法大師空海が勧請したとされる。『拾芥抄』では、10世紀前半、南東に位置する十三町に宇多天皇皇女孚子内親王の御所である「桂宮」が存在したとする。平安時代末期の同町には平業忠の邸宅があり、四分の一町を占めた。寿永2（1183）年には後白河法皇がこの業忠邸に遷り、六条殿となるが、文治4（1188）年に焼失する。その後、一町に規模を拡張して再建された六条殿を中心として周辺地域が開発されてゆくと考えられる。南に隣接する十二町には、『山槐記』文治元（1185）年8月26日条によれば、平安時代末期、藤原親雅の邸宅があり、六条殿での仏事に際して宿所として使用されたとされる。

また、寛延3（1750）年に作成され、平安時代から応仁の乱前頃の状況を描いた『中古京師内外地図』は、平安時代末期に六条堀川にあったとされる清和源氏の居館の所在地を十二町にあてている。

東に隣接する十四町には源仲国邸があったことが、『明月記』建永元（1206）年11月29日条から知られ、十五町には平安時代中期から鎌倉時代にかけて、源頼義が建立した「みのわ堂」が存在したとされる。

上記のように、六条殿を中心として、そ



図4 中古京師内外地図
(国立国会図書館デジタルコレクションより)

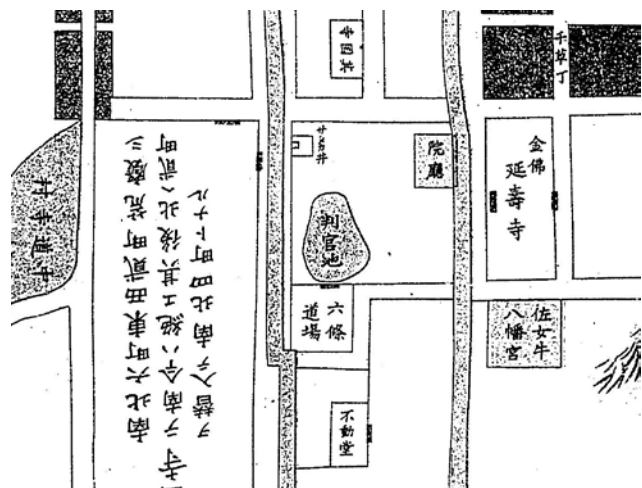


図5 中昔京師地図
(国立国会図書館デジタルコレクションより)

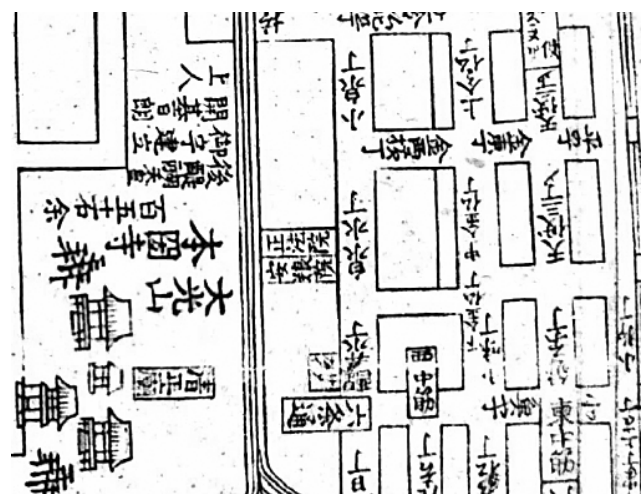


図6 改正京町御絵図細見大成
(京都市史 地図編より)

の周辺に武家を含めた院近臣の邸宅が存在していたことを窺うことができる。

一方、調査地が位置する十一町については、『延喜式』付図では何も記載がされておらず、平安時代前中期の当町における土地利用の状況は不明である。平安時代中期以降についても、『平安遺文』の記述から、11世紀前半に保と刀禰の存在を確認することができるが、詳細は不明である。また、『中古京師内外地図』では「市家」として表現されていることから、宅地として利用されていたと考えられるが、所有者等の詳細は不明である。中世の当町については、応仁の乱以後から天正年間までの洛中洛外の状況を描いたとされる、宝暦3（1753）年作成の『中昔京師地図』には、十二町から十一町の南端部にわたって池が描かれ、「判官池」と記載されている。また、調査地の現在の地名は「醒ヶ井泉水町」であるが、寛永14（1637）年作成の洛中絵図には既に「泉水丁」との記載が見える。宝暦12（1762）年刊の『京町鑑』では「泉水町」となり、その町名由来について「此町往昔源義経六条室町の御居館の御庭の泉水ありし旧地内、因りて号す。」と記す。「泉水町」、「判官池」については、元禄15（1702）年刊の『山州名跡志』の源氏堀河館に関する記述の中で「今云ふ醒井通六條坊門の南に至つて、其方境なりと。坊門の南の町を云泉水町。人家の後に池跡存す。是其境内にある所なりと。云判官殿池也。愚案、此義誤にして、此所は後白河法皇の御所の地、西の境なる歟」とある。『中古京師内外地図』、『中昔京師地図』を作成した森幸安は、地図を作成するにあたり既存の地誌、歴史書等を引用しており、『中昔京師地図』における「判官池」の記述は上記『山州名跡志』によるものと考えられる。

近世の十一町については、慶応4（1868）年に作成された『改正 京町御絵図細見大成』には西半に「正法院」、「安養院」と記載されている。「正法院」は、『京町鑑』にその存在が記され、明治14（1881）年に廃寺となった。「安養院」は貞享2（1685）年刊行の『京羽二重』浄土宗知恩院の末寺として「さめが井五条下ル町 安養院」と見え、『京都坊目誌』は永禄元（1558）年に僧深誉が開基し、天正2（1574）年に建立した堂宇に始まるとするが、現存はしていない。

参考文献

- 下中邦彦 「京都市の地名」『日本歴史地名体系第二七巻』 平凡社 1979年
角田文衛 『平安京提要』 角川書店 1994年
上杉和央 「地誌作成者としての森幸安」『歴史地理学 47-4』 2005年

2 既往の調査（図7）

昭和52年度に十二町の南端部で実施された調査では、桃山時代から江戸時代前期の土壌墓をはじめ、掘立柱建物、井戸、竈など平安時代から近世の遺構が検出されている。⁽¹⁾

昭和54年度に五町において、現東急ホテル建設に伴って実施された調査では、平安時代から江戸時代の遺構が多数検出されている。平安時代中期から後期にかけて宅地であったことを示す遺構が検出されているが、鎌倉時代から室町時代には井戸・土坑・柱穴が増加し、土地の利用頻度が高くなったと考えられる。室町時代前期には本國寺が創建され、調査地は境内北東部に位置す

るが、大規模な建物・施設などの遺構は検出されていない。室町時代末期には断面V字形の溝が多数造られるが、天文法華の乱で全焼し、その後の再建時にこれらの溝が埋められたとする。江戸時代には遺構・遺物が減少するものの、大規模な礎石建物や舟入が検出されている。⁽²⁾

昭和56年度に三・六・十二町の北部で実施された調査では、平安時代の六条坊門小路南側溝と、それに南接する地域の建物柱穴が検出されている。⁽³⁾

昭和57年度に十・十四町で実施された調査では、平安時代の土坑・井戸・柱穴、鎌倉時代から室町時代の土坑・井戸・溝・柱穴、桃山時代から江戸時代の土坑・井戸が検出されている。⁽⁴⁾

昭和58年度に十四町・三坊三・六町の北部で実施された発掘調査では、古墳時代から江戸時代までの遺構が検出されているが、調査範囲が狭いために遺構の性格は判然としないうとしている。⁽⁵⁾

昭和59年度に九町で実施された調査では、北東から南西に向かって走る弥生時代の流路が検出されている。当流路からは近畿第Ⅱ・Ⅲ様式のを主体として弥生土器が多量に出土している。調査区北西部で平安時代の柱穴が少数検出され、中世の遺構として土坑、柱穴、溝が検出されている。⁽⁶⁾

昭和62年度に堀川小路東半と六条大路を含む十二町西端部で実施された調査では、六条大路北側溝、路面および堀川小路東側溝は検出されず、現堀川通りの西半が、中世から近世にかけて堀

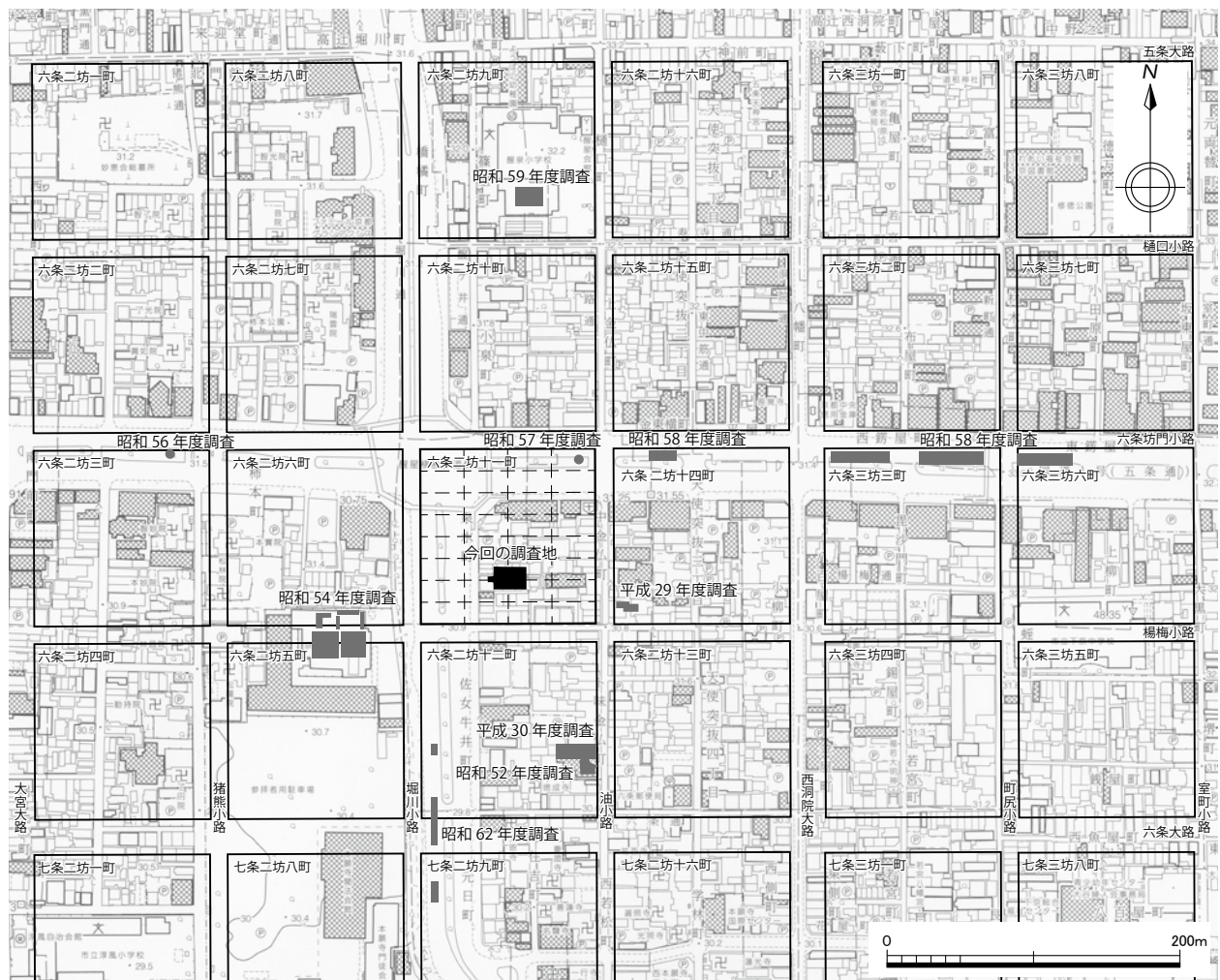


図7 既往調査位置図（1：5,000）

川の旧河道であったことが確認された。⁽⁷⁾

平成 29 年度に十四町で実施された調査では、基盤層を形成する礫層が古墳時代前期に安定し、11 世紀前半および 13 世紀前半に整地が行われたことが判明した。また、ウマの埋葬遺構が検出された。

平成 30 年度に十二町で実施された調査では、十四町と同様、11 世紀前半の整地層が確認され、当該の整地がかなり広範囲に行われたと考えられた。また、11 世紀末から 12 世紀初頭に機能した苑池をはじめ、柱座を持つ礎石が据えられた 14 世紀中葉から後半以前の柱列、17 世紀中葉の石室などが検出されている。⁽⁸⁾

参考文献

- (1) 鈴木久男ほか「平安京左京六条二坊十二町」『昭和 52 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011 年
- (2) 平尾政幸ほか「平安京左京六条二坊五町・猪熊殿跡・本圀寺跡」『昭和 54 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012 年
- (3) 上村和直ほか「左京六条二坊」『昭和 56 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983 年
- (4) 上村和直ほか「左京六条二坊」『昭和 57 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984 年
- (5) 上村和直ほか「左京六条二・三坊」『昭和 58 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985 年
- (6) 上村和直ほか「平安京左京六条二坊」『昭和 59 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987 年
- (7) 原山充志ほか「左京六条二坊」『昭和 62 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991 年
- (8) 佐藤亜聖ほか『平安京左京六条二坊十二町跡 烏丸綾小路遺跡』公益財団法人元興寺文化財研究所 2019 年

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序（図8～10）

調査地における現地表面の標高は、調査区北西角付近に設置した基準点K. 4で30.592 m、南東角付近に設置したK. 1で30.290 m、調査区北東角で約30.300 m、南西角で約30.500 m、南東角で約30.200 mであり、北西から南東に向かって低くなる地形を呈する。

現地表面下約1.1 m～約1.5 mは近現代の盛土・整地土で、層厚は調査区の北部および西部が最も薄く、南東部で最大になっている。この近現代盛土・整地土直下に10YR4/2 灰黄褐色～10YR4/3 にぶい黄褐色の細粒砂からなる近世整地土が堆積しており、層厚は0.2 m～0.6 mである。当該層を除去すると10YR4/1 褐灰色細粒砂からなる第1層に達するが、調査区西端から約2.0 mの範囲では基盤層が露出する。第1層の層厚は0.1 m～0.4 mで、西に行くにつれて厚く堆積する。第1層直下に10YR3/1 黒褐色細粒砂（弱粘性）からなる第2層が堆積しており、層厚は0.1 m～0.3 mで、直上層と同様に調査区西部の方が厚くなっている。第2層を除去すると第3層が露出するが、当該層は第3-1層～第3-3層に細分することができる。第3-1層はN 5/0 灰色～N 3/0 暗灰色極細粒砂～シルト（強粘性）からなり、底部には5YR4/2 灰褐色～5YR4/3 にぶい赤褐色を呈する有機物・植物遺体腐食層が見られる。層厚は0.2 m～0.4 mである。第3-2層は、2.5Y5/1 黄灰色～2.5Y4/1 黄灰色細～粗粒砂を主要素として2.5Y4/1 黄灰色～2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂（粘性有）が混じり、底部にはφ 10cm 前後の極大礫が混じる。層厚は0.3 m～0.5 mである。第3-3層は7.5YR3/2 黒褐色細粒砂を主要素として、φ 10cm 前後の極大礫が混じる。層厚は0.1 m～0.2 mである。

拡張区においては、近現代盛土・整地土の層厚は0.5 m～0.9 m、その直下に堆積する近世整地土の層厚が0.1 m～0.24 mである。第1層および第2層に相当する堆積層は確認されず、近世整地土を除去した段階で基盤層が露出する。基盤層は2.5Y6/2 灰黄色～2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂、φ 10cm～15cm の礫を多量に含む7.5Y5/1 灰色粗粒砂からなる。

調査は、第1層上面を第1面、第2層上面を第2面、基盤層上面を第3面として実施した。

2 検出遺構

第1面および第2面で検出された遺構は主に土坑で、それに加えて溝状遺構、ピットである。第3面では池を中心として土坑を検出した。第1面で検出した遺構からは17世紀中葉から18世紀前葉、第2面で検出した遺構からは15世紀後葉から16世紀前葉、第3面の遺構からは15世紀後葉に属すると考えられる遺物が出土した。

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代	土坑 0003・0007・0011・0014、溝 0009・0024、ピット 0016・0017	
室町時代	土坑 0028・0029・0030 池 0052、土坑 0041・0044・0045、溝 0053、壕 0051	

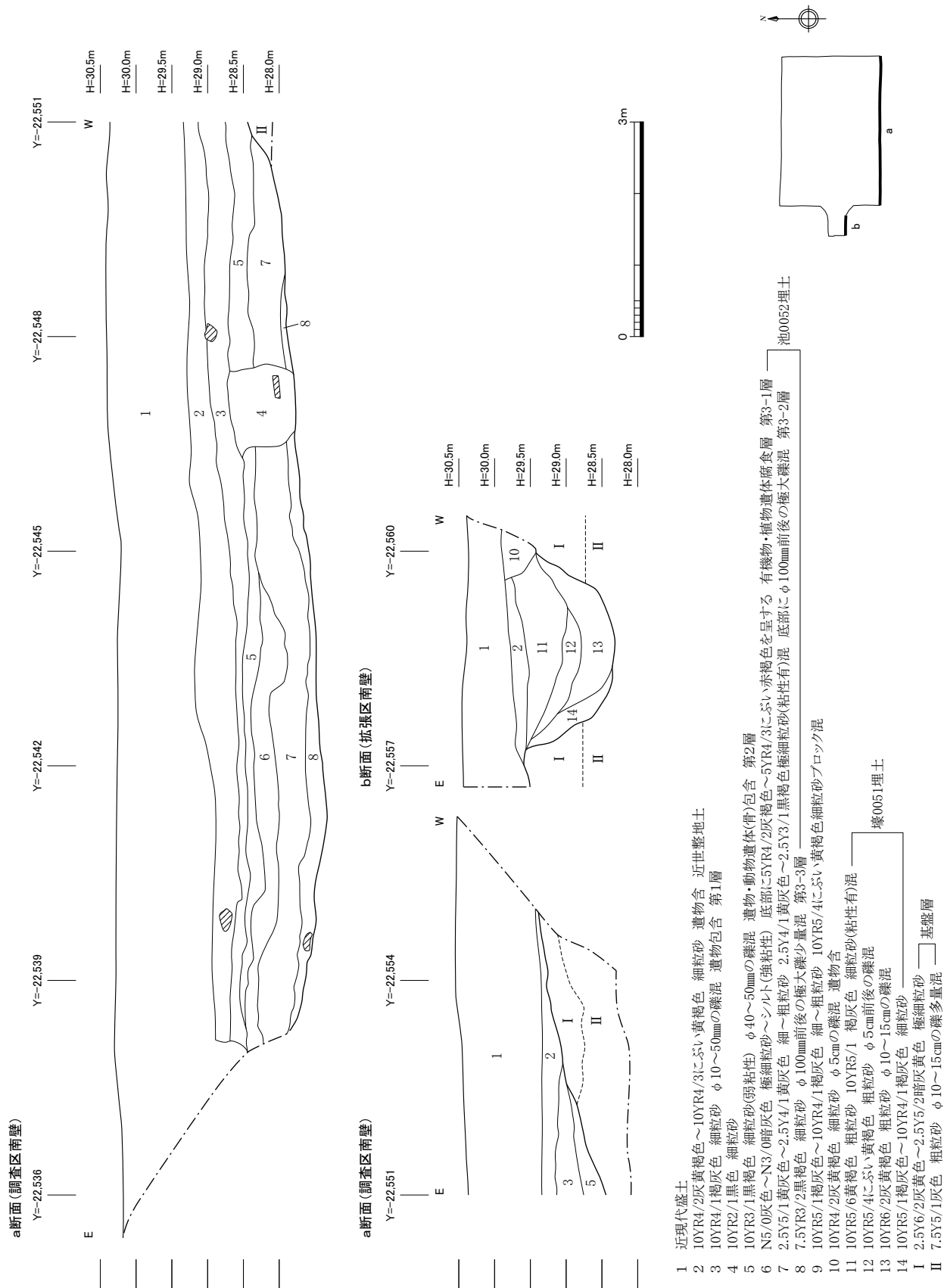
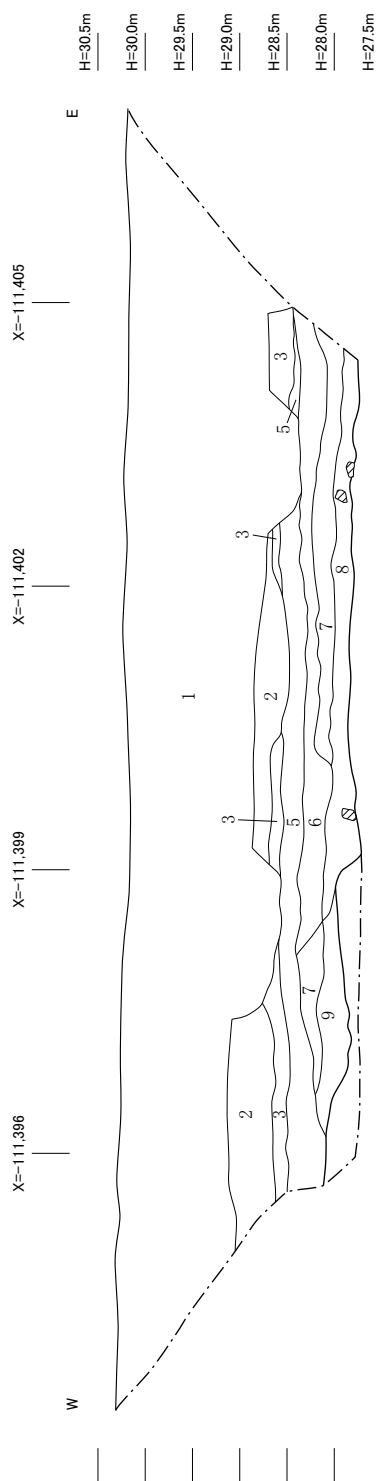


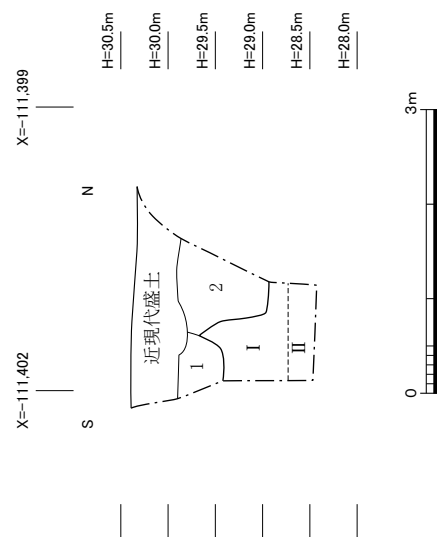
図8 調査区・拡張区南壁土層断面図 (1 : 80)

c断面(調査区東壁)



* 土色は図8と共通

d断面(拡張区西壁)



- 1 10YR4/2灰黄褐色 細粒砂 φ5cmの礫混 遺物含
- 2 10YR4/1褐灰色 細粒砂 10YR5/4にふい黄褐色 極細粒砂(粘性有)ブロック混 遺物含
- I 2.5Y6/2灰黄色～2.5Y5/2暗灰黄色 極細粒砂
- II 7.5Y5/1灰色 粗粒砂 φ10～15cmの礫多量混

基礎層

図9 調査区東壁・拡張区西壁土層断面図 (1 : 80)

(1) 第1面 (図11)

土坑数基、ピット2基、溝状遺構数条を検出したが、遺構密度は低い。また、土坑については多くが不定形な平面形を呈し、検出面から遺構底までの深さが0.1 m～0.2 m程度と浅いものが多い。建物、井戸等は検出されなかった。

〔土坑〕

土坑 0003

調査区中央部東壁際で検出した。掘り方は南北約2.0 mで、東半が調査区外になるため全体規模は不明であるが、西半約1.0 m分を検出した。検出面から遺構底までの深さは約0.8 mである。17世紀後葉から18世紀前葉の所産と考えられる遺物が出土している。

土坑 0007

調査区はほぼ中央で検出した。南北長は最小約1.6 m、最大で約2.6 m、東西幅約1.6 mの不定形平面を呈し、検出面から底部までの深さは最小約0.2 m、最大約0.4 mである。17世紀後葉から18世紀前葉の所産と考えられる遺物が出土している。

土坑 0011

調査区南西部で検出した。南北長約1.3 m、東西幅約1.5 mの横長方形土坑で、検出面から底部までの深さは約0.3 mである。17世紀中葉から18世紀前葉の所産と考えられる遺物が出土している。

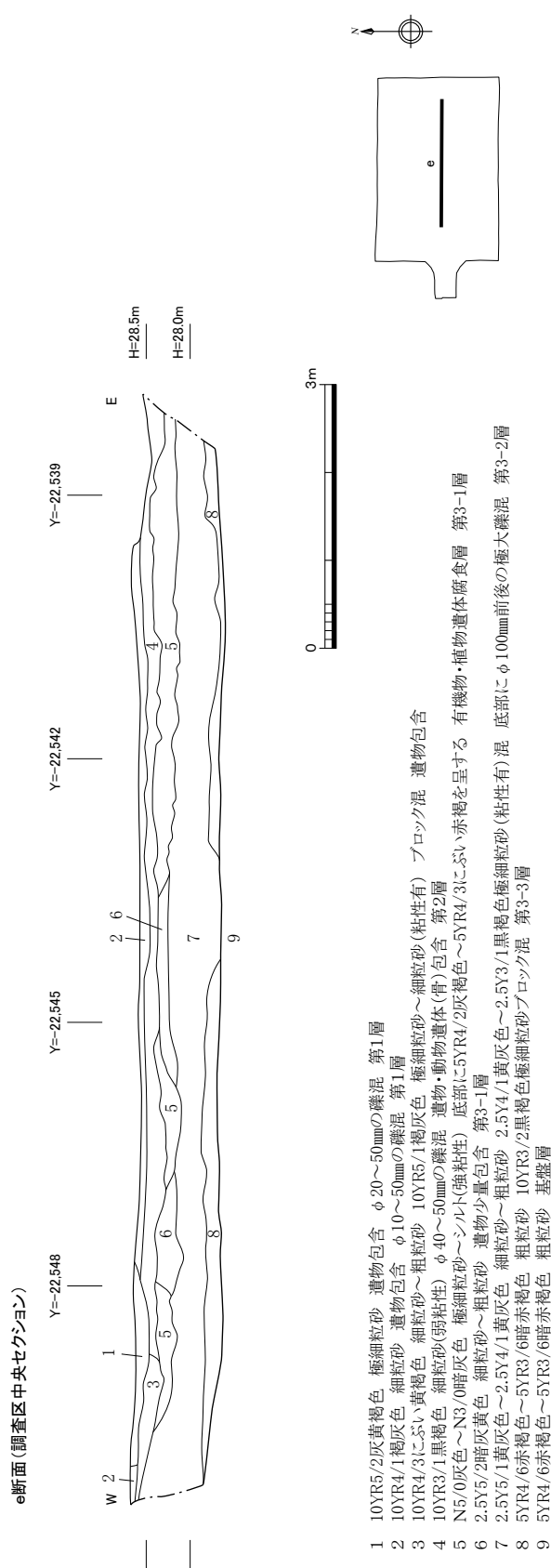


図10 調査区中央セクション土層断面図 (1:80)

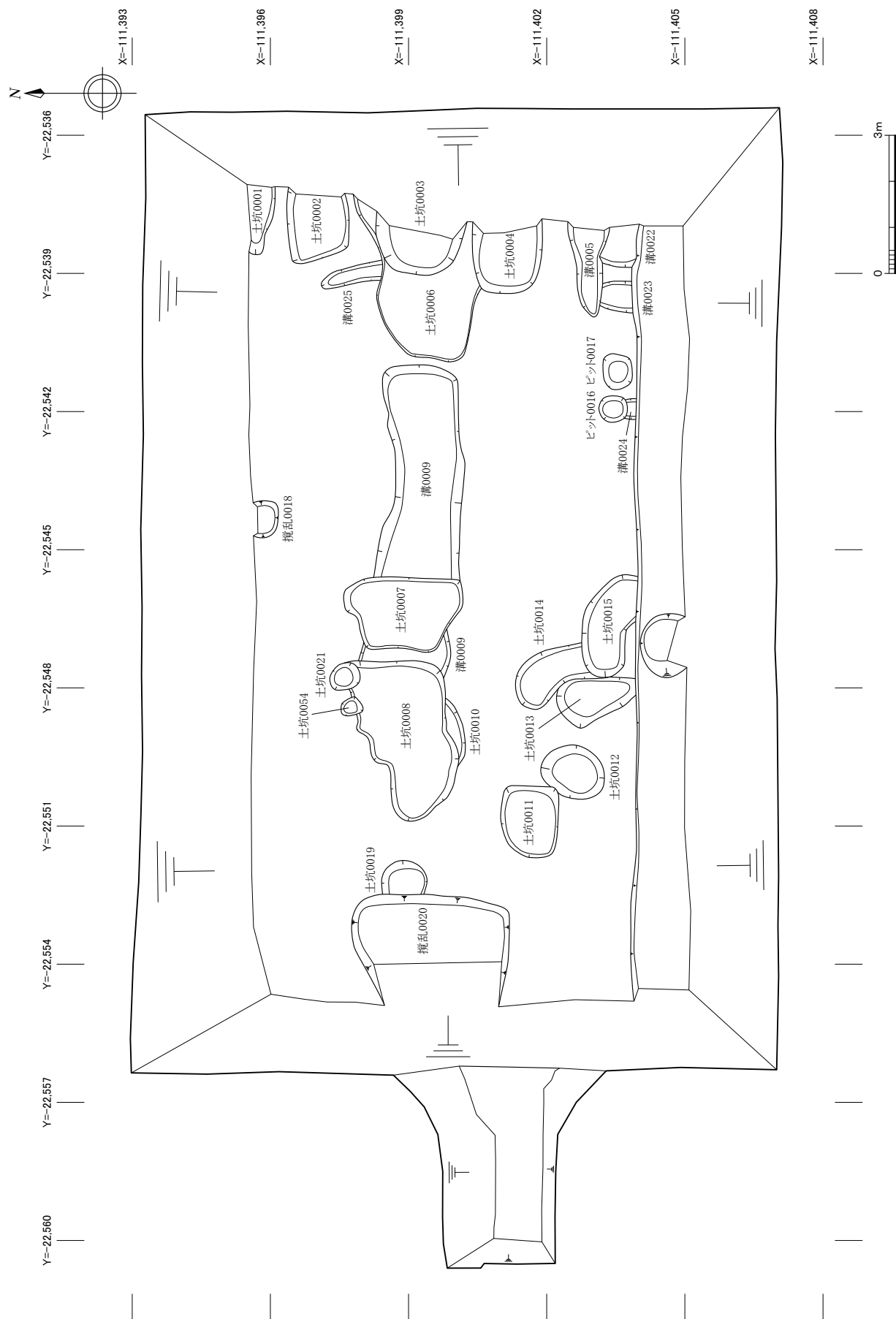


図11 第1面調査区全体平面図 (1 : 120)

土坑 0014

土坑 0013 の東で検出した。南北長 1.6 m 以上、東西幅 0.8 m の不定形平面を呈する土坑で、検出面から底部までの深さは約 0.15 m である。土坑 0013 の東部を切っており、土坑 0015 に南半を切られる。17 世紀後葉から 18 世紀前葉の所産と考えられる遺物が出土している。

〔ピット〕

ピット 0016

調査区南東部で検出した。直径 0.6 m の円形平面を呈し、検出面から底部までの深さは約 0.1 m である。17 世紀後葉から 18 世紀前葉の所産と考えられる遺物が出土している。

ピット 0017

ピット 0016 の東で検出した。南北長約 0.6 m、東西幅約 0.8 m の横長方形平面を呈し、検出面から底部までの深さは約 0.2 m である。17 世紀後葉から 18 世紀前葉の所産と考えられる遺物が出土している。

〔溝〕

溝 0009

調査区中央より、やや北で検出した東西方向に走る溝状遺構で、正方位にのる。幅は最小 1.5 m、最大 1.85 m で、全長約 6.5 m、検出面から底部までの深さは約 0.35 m である。17 世紀後葉から 18 世紀前葉の所産と考えられる遺物が出土している。

溝 0024

調査区南東部で検出した。幅約 0.45 m の南北方向に走る溝状遺構で、北はピット 0016 に切られる。検出面から底部までの深さは 0.1 m 足らずである。17 世紀後葉から 18 世紀前葉の所産と考えられる遺物が出土している。

(2) 第 2 面 (図 12)

不定形な平面形を呈する土坑状の遺構を数基検出したが、後者の土坑状遺構群は検出面から底部までの深度が 0.1 m 前後と浅い。また、第 1 面と同様に建物、井戸等は検出されなかった。

〔土坑〕

土坑 0028

東端部で検出した。不定形平面を呈し、最大幅 2.6 m、南北長 1.5 m 以上を測る。検出面から底部までの深さは約 0.1 m である。15 世紀後葉と考えられる遺物が出土している。

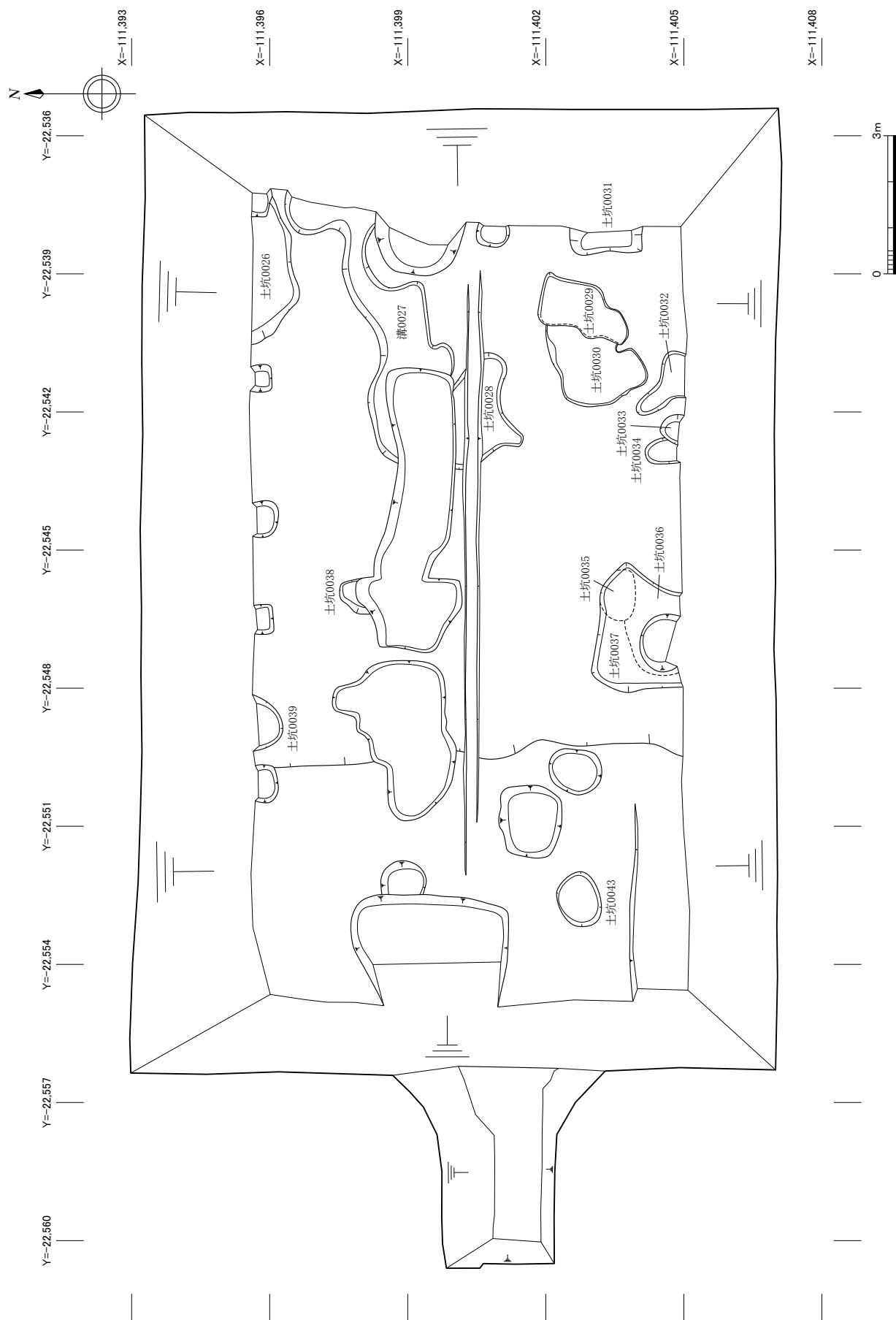


图12 第2面調査区全体平面図 (1 : 120)

土坑 0029

南北長 2.08 m、最小東西幅 0.3 m、最大東西幅 1.05 m の不定形平面を呈する。検出面から底部までの深さは約 0.1 m である。15 世紀後葉と考えられる遺物が出土している。

土坑 0030

土坑 0029 の西に接して検出した遺構である。最小南北長 1.4 m、最大南北長 1.9 m、東西幅 1.96 m 以上の不定形平面を呈する。検出面から底部までの深さは約 0.1 m である。

(3) 第 3 面 (図 13)

第 1 面で検出した土坑 0003 の掘削深度が約 1.0 m で、基盤層に達していることにくわえ、第 2 面上面まで掘り下げた段階で調査区西端部において基盤層が露出していたことから、調査区西端部と東端部で基盤層上面の比高差が約 1.0 m に達することを確認していた。そのため、第 2・3 層の堆積状況を確認することを目的として、調査区中央に設定したセクションに沿って土層確認用のサブトレンチを設定した。サブトレンチの土層確認から、第 3 層が水性堆積であることが確認されたため、当該層が堆積する調査区東部について湿地の存在を想定した。第 2 層を除去し、第 3 層上面で精査を実施したが、遺構は検出されなかったため、第 3 層の掘削を行った。

〔池〕

池 0052

第 3 層の掘削を進めたところ、調査区南東部において景石を検出し、当初想定していた湿地ではなく、苑池であり、第 3 層が当遺構の埋土であることが判明した。南北長 6.3 m、東西幅 10.4 m にわたって池の肩を検出したが、調査区の東および南へひろがるため、全体規模は不明である。池埋土である第 3 層は大きく 3 層に細分される。最上層である第 3-1 層は N 5/0 灰色～N 3/0 暗灰色極細粒砂～シルトからなり、強い粘性を有する。底部には 5YR4/2 灰褐色～5YR4/3 に近い赤褐色を呈する有機物・植物遺体腐食層が見られる。自然堆積層と考えられる。第 3-2 層は、2.5Y5/1 黄灰色～2.5Y4/1 黄灰色の細～粗粒砂を主要素として、粘性を有する 2.5Y4/1 黄灰色～2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂、φ 10cm 前後の礫が混じる。包含される遺物は第 3 層中で最も多い。第 3-3 層は 7.5YR3/2 黒褐色細粒砂と基盤層である 7.5Y5/1 灰色粗粒砂が混じりあう。包含される遺物は僅少である。第 3-2 層には斜交層理が見られ、水流による堆積層と考えられる。埋土を掘削すると基盤層に達し、検出された景石が基盤層直上に据えられていたことから、池底面は基盤層によって形成されていたと考えられる。池底面には、その構築のために基盤層上面に粘土を張り付けたような痕跡は認められなかった。また、第 3-2 層、第 3-3 層ともに φ 10cm ～ 15cm の礫が多量に混じるが、埋土全体に分布しており、池肩部に集中しているような状況は確認できなかった。

また、第 3 層上面の標高値は 28.200 m ～ 28.300 m、池肩部の標高値は 27.900 m 前後、最底部の標高値は約 27.360 m で、調査区西端部における基盤層上面の標高値は 29.500 m 前後であることから、池肩部との比高差は 1.6 m、平面距離で約 5.0 m を測る。調査区南壁における断面では、調査

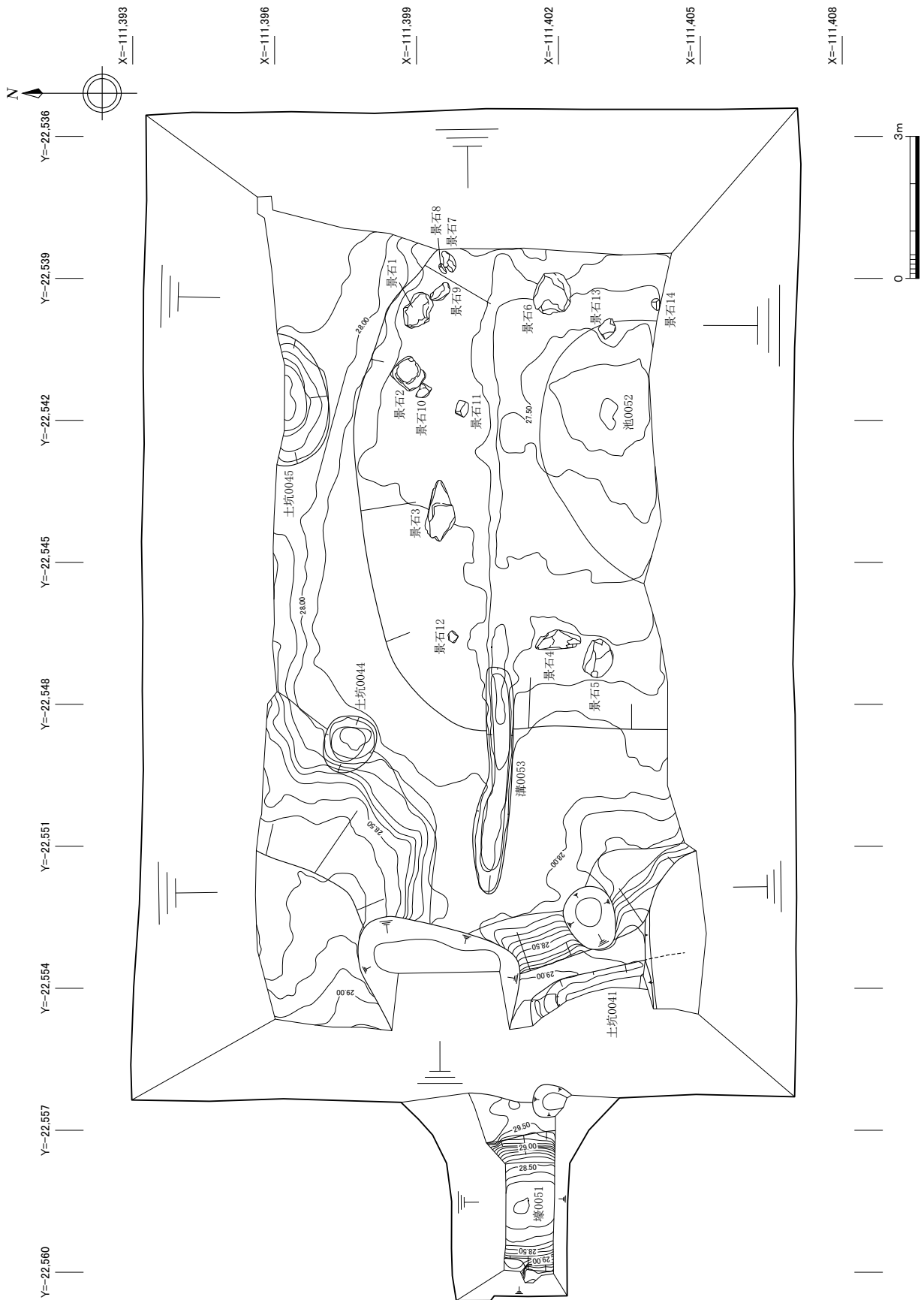


图13 第3面調査区全体平面図 (1 : 120)

区西端部から池 0052 肩部までの間に人為的に比高差を付けたと見なされる造作の痕跡は観察されず、比較的急な傾斜を呈する。このことから、北西から南東へと低くなる原地形を利用して池の造作を行ったものと考えられる。

景石は 14 点検出され、そのうち 6 点（景石 1～6）は長軸 0.66 m～1.30 m、短軸 0.45 m～0.60 m、その他の 8 点（景石 7～14）は、長軸 0.25 m～0.5 m、短軸 0.1 m～0.25 m である。これら景石 1～6 について、公益財団法人 益富地学会館に鑑定を依頼した。鑑定は、現場にて肉眼観察によって行ったが、景石 1 については肉眼鑑定にくわえて偏光顕微鏡による観察を行った。結果、景石 1 は花崗閃緑斑岩、景石 2 は花崗岩、景石 3～6 はチャートであるとの結果を得た。また、景石 1～6 のうち、1～4 は基盤層に直接据えられていたが、5 および 6 は第 3-3 層に近似した黒褐色を呈する粗流砂層上に据えられていた。このことから、景石 5、6 は池が構築された当初は設置されていなかったと考えられる。これら景石上面の標高値は約 27.750 m～28.220 m で、検出した池肩部の標高値が 27.850 m～27.960 m であることから、池水面の標高値は 27.750 m 前後と推測される。この場合、池最深部における水深は 0.39 m 前後となる。

〔土坑〕

土坑 0041

調査区南西端部で検出した、南北方向の縦長方形平面を呈する土坑である。南北長 2.65 m、東西幅 0.4 m 分を検出したが、西は調査区外へ広がり、南は試掘坑に切られているため、全体規模は不明である。検出面から底部までの深さは 0.3 m～0.65 m である。

土坑 0044

池 0052 の北西で検出した。長軸 1.26 m、短軸 1.06 m の楕円形平面を呈し、検出面から底部までの深さは約 0.2 m である。

土坑 0045

池 0052 の北側東寄りの調査区壁際で検出した。東西幅約 2.8 m、南北 0.9 m 以上の楕円形平面を呈する土坑であるが、遺構の北半は調査区外に広がるため、全体規模は不明である。検出面から遺構底部までの深さは約 0.3 m を測り、標高値は 27.675 m である。埋土が池 0052 と共通していることから、同時期に埋没したものと考えられる。

15 世紀後葉の所産と考えられる土師器皿がまとまって出土しており、また、底を打ち欠いた可能性が考えられる黒色土器鍋が出土している。

〔溝〕

溝 0053

調査区西半中央部で検出した、全長 4.78 m、幅 0.48 m～0.72 mを測る東西方向の溝で、検出面から底部までの深さは 0.17 m～0.2 mである。東端部は池 0052 を切る。遺物は出土しなかった。

(4) 拡張区

拡張区においては、先述したように第 1 層および第 2 層に相当する堆積層は確認されず、近世整地土を除去した段階で基盤層が露出したため、その上面を第 3 面相当として調査を行った。その結果、南北方向の壕の存在を確認した。

〔壕〕

壕 0051

東西幅 2.9 m、検出面から底部までの深さ 1.3 mを測る壕で、南北長 2.0 m分を検出した。基盤層上面の標高が下がり始める地点から西へ約 3.4 m、池 0052 の西肩から西へ約 8.6 mの場所に位置する。調査区が狭く、検出長が 2.0 m分と短いため、全体の形状や規模は不明であるが、池 0052 を有する庭園を含む敷地の西限に開削された壕の可能性が考えられる。底部の標高値は 28.200 mで、池 0052 底部の最も低い箇所の標高値よりも 0.84 m高い。15 世紀後葉の遺物が出土している。

3 出土遺物

遺物はコンテナで 40 箱分が出土した。土師器、陶磁器が主で、他に瓦質土器、瓦、銭貨、木製品が出土している。

表 2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	A ランク点数	B ランク 点数	C ランク 箱数
江戸時代	土師器、瓦質土器、土製品		土師器 11 点、瓦質土器 1 点、土製品 1 点		
室町時代	土師器、須恵器、焼締陶器、瓦器、瓦、土製品、銭貨、石製品、木製品		土師器 38 点、須恵器 2 点、焼締陶器 3 点、瓦器 8 点、瓦 1 点、土製品 1 点、銭貨 1 点、石製品 4 点、瓦経 1 点、木製品 1 点		
平安時代	土師器、瓦		土師器 4 点、瓦 1 点		
合計		29 箱	78 点 (3 箱)	0 点	26 箱

* コンテナ箱数は、整理段階で 11 箱減少した。

(1) 第 1 面遺構出土遺物

第 1 面で検出した遺構から出土した遺物は京 XⅢ期中に属するものが主体をなし、京 XⅡ期新から XⅢ期古に属すると考えられるものが少量見受けられ、17 世紀中葉から 18 世紀前葉のものと考えられる。

〔土坑〕

土坑 0003

1 は瓦質土器の鉢で、口径 11.8cm、器高 4.4cm。丸底の底部から体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部でやや内側に傾斜する。口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部上半内面にはヨコナデ、体部下半内面から底部内面にかけてナデが施される。

土坑 0007

2 は土師器皿 Nr で、口径 5.6cm、器高 1.2cm。底部から緩く内湾しながら外方へ体部が立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、内面にナデ、口縁部内外面にヨコナデが施される。

3 は土師器皿 Sb で、口径 9.6cm、器高 1.6cm。平底で、やや内湾しながら外方へ体部が立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡がのこり、内面および口縁部内外面にヨコナデが施される。

土坑 0011

4 は土師器皿 S で、口径 10.6cm、器高 2.2cm。やや丸みを帯びた底部から直線的に体部が立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。

5 は土師器皿 S で、口径 11.0cm、器高 2.0cm。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。

6 は土師器皿 S で、口径 11.0cm、器高 2.1cm。やや丸みを帯びた底部から内湾気味に体部が立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。

土坑 0014

7 は土師器皿 S で、口径 10.0cm、器高 1.9cm。やや丸みを帯びた底部からやや外反しながら外方へ体部が立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から底部内面にヨコナデが施される。

8 は土製品小壺で、口径 2.0cm、底径 2.6cm、器高 2.4cm。

9 は土師器焙烙鍋で、口径 29.8cm、器高 6.6cm。体部は内湾しながら立ち上がり、外方へ屈曲して内湾気味に口縁部が伸び、口縁端部は平坦に仕上げられる。体部外面は指押さえの後にナデが施され、口縁部内外面にヨコナデ、体部内面にナデが施される。

〔ピット〕

ピット 0016

10 は土師器皿 Nr で、口径 6.0cm、器高 1.0cm。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡が残り、口縁端部から底部内面にかけてナデが施される。

11 は土師器皿 S で、器高 1.8cm。底部から外方へ直線的に体部が立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

ピット 0017

12 は土師器皿で、口径 7.5cm、器高 1.6cm。やや丸みを帯びた底部から体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部は尖り気味に収められる。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡が残り、口縁部から底部内面にかけてナデが施される。

13 は土師器皿 S で、口径 10.0cm、器高 1.8cm。やや丸みを帯びた底部から外方へ直線的に体部が立ち上がり、口縁部は丸く収められる。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。

〔溝〕

溝 0009

14 は塩壺で、口径 5.5cm、底径 3.8cm、器高 9.0cm。

溝 0024

15 は土師器皿 Sb で、口径 9.5cm、器高 2.1cm。やや丸みを帯びた底部から外方へ直線的に体部が立ち上がり、口縁部が丸く収められる。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。

(2) 第 1 層出土遺物

第 1 層に包含されていた遺物は京 X I 期新から X II 期古に属し 16 世紀後葉から 17 世紀前葉と考えられるものが主体をなすが、11 世紀後葉から 12 世紀前葉に属するものが極少量含まれる。

16 は土師器皿 A である。口径 9.6cm、器高 1.5cm。体部は緩く内湾しながら外方へ立ち上がり、口縁部は「て」字状を呈する。混入品と思われる。

17 は土師器皿 A である。口径 11.1cm、器高 1.4cm。体部は緩く内湾しながら外方へ立ち上がり、口縁部は「て」字状を呈する。混入品と思われる。

18 は土師器皿 Nr である。器高 1.3cm。

19 は土師器皿 Nr である。口径 4.8cm、器高 1.2cm。底部から内湾しながら体部がやや急に立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。外面に指押さえの痕跡が残り、内面にナデが施される。

20 は土師器皿 Nr である。口径 7.1cm、器高 1.4cm。底部から内湾しながら体部がやや急に立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。外面に指押さえの痕跡が残り、内面にナデが施される。

21 は土師器皿 S である。口径 11.5cm、器高 2.0cm。底部から直線的に外方へ体部が立ち上がり、口縁端部が丸く収められる。体部下部から口縁部へ向けて器壁が厚くなり、口縁部が肥厚する。体部に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から底部内面にかけてヨコナデが施される。

22 は瓦器羽釜である。口縁部がやや開き気味に直線的に立ち上がり、端部は平坦に収まる。

23 は信楽産の焼締陶器播鉢である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反して端部を平坦に収める。内面には 6 条 1 単位の播り目を刻む。

24 は軒丸瓦であるが、瓦当を欠損しており、残存長は 30.7cm、幅 14.0cm である。丸瓦先端にカキヤブリを入れ、凹凸両面に少量の補填粘土を張り付けて瓦当を接合する。凸面は縦方向のナデによって叩き痕跡を消し、凹面には糸切り痕と吊紐の痕跡が残る。端面凸面側を浅く、凹面側を深く面取りする。玉縁には釘穴が穿たれている。

(3) 第 2 面遺構出土遺物

第 2 面で検出された遺構からは 15 世紀後葉から 16 世紀前葉に属すると考えられる遺物が出土しているが、11 世紀後葉から 12 世紀前葉に属するものも含まれる。

〔土坑〕

土坑 0028

25 は土師器皿である。口径 10.9cm、器高 1.7cm。

土坑 0029

26 は土師器皿 A である。口径 10.2cm、器高 1.6cm。丸みを帯びた底部から内湾しながら体部が立ち上がり、口縁部で外方へ強く屈曲する。口縁は上方へ立ち上がり、端部は丸く収められる。「て」字状口縁皿である。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から底部内面にかけてヨコナデが施される。

27 は土師器皿 A である。口径 9.6cm、器高 1.3cm。口縁部の屈曲はやや弱く、口縁端部は平坦気味に収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から底部内面にかけてヨコナデが施される。

28 は瓦器羽釜である。

土坑 0030

29 は硯である。残存長 9.5cm、残存幅 6.4cm、厚み 2.2cm。陸部のみ残存している。

(4) 第 2 層出土遺物

第 2 層に包含されていた遺物は京 X 期新から X I 期古に属し、15 世紀後葉から 16 世紀前葉の所

産と考えられるものが主体をなす。

30 は土師器皿で、口径 8.5cm、器高 1.9cm。体部は内湾しながらやや急に立ち上がり、口縁部は外反して端部が丸く収められる。体部外面に指押さえの痕跡残り、口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデが施される。

31 は土師器皿 N で、口径 7.4cm、器高 1.7cm。体部は、底部周縁部で強く屈曲して緩く外反しながら立ち上がり、口縁部は緩く外反して口縁端部は尖り気味に丸く収められる。体部外面に指押さえの痕跡残り、口縁部外面から底部内面にかけてヨコナデが施される。

32 は土師器皿 N で、口径 11.1cm、残存器高 2.1cm。底部から強く屈曲して体部が直線的に立ち上がり、外反して直線的にのびる口縁部が肥厚する。口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

33 は土師器皿 S で、口径 8.0cm、器高 2.0cm。底部からやや外反しながら直線的に体部が立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデが施される。

34 は土師器皿 S で、口径 8.7cm、器高 1.8cm。丸みを帯びた底部から内湾しながら体部が立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡残り、口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。

35 は土師器皿 S で、口径 10.4cm、器高 2.1cm。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部に浅い凹線が認められる。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡残り、口縁部外面から底部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。

36 は土師器皿 S で、口径 11.2cm、器高 2.1cm。体部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

37 は土師器皿 Nr で、口径 6.5cm、器高 1.2cm。底部外面から口縁部外面にかけて指押さえの痕跡残り、内面にナデが施される。

38 は土師器皿 Sb で、口径 7.8cm、器高 1.4cm。底部は僅かに突出し、体部は直線的に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡残り、口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面にナデが施される。

39 は擂鉢である。内面に 6 条 1 単位の擂り目を刻む。

40 は瓦器羽釜である。口径 19.0cm、残存器高 3.8cm。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は肥厚して平坦に収まる端部に凹線が巡る。

41 は瓦器羽釜である。口径 20.9cm、残存器高 6.0cm。鰐部以下は外方へ直線的に、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部が平坦に収められる。体部には指押さえの痕跡残り、口縁部外面にヨコナデ、内面にハケが施される。

42 は瓦器羽釜である。口径 22.8cm、残存器高 7.7cm。直線的に体部が立ち上がり、口縁端部は

平坦に収められる。体部外面に指押さえの痕跡が残り、鐙部から口縁端部にかけてヨコナデ、内面にハケが施される。

43 は瓦器の羽釜で、口径 27.1cm、残存器高 6.7cm。体部は直線的に立ち上がり、鐙部でやや内傾する。口縁部はやや内傾し、端部が平坦に収められる。

44 は瓦経である。最大残存長 8.6cm、幅 3.5cm、厚さ 2.0cm を測る。胎土は細密、焼成は硬質で灰白色を呈する。四面にナデを施し、裏面の右端には幅 0.5cm、深さ 0.7cm の切り欠きが片臍状に入れている。表裏両面の中央に縦罫線が引かれ、二行にわたって『妙法蓮華経』『譬諭品第三』の一部が線刻により書写されている。

書写されている経文は以下の通りで、太字部が残存する。

(表)「譬説周正説段 長行 如来答説」

舍利弗。如長者。初以三車。誘引諸子。然後但与大車。宝物莊嚴。安穩第一。然彼長者。
無有虚妄之咎。如来亦復如是。無有虚妄。初説三乘。引導衆生。然後但以大乘。
而度脱之。何故故。如来。有無量智慧。力無所畏。諸法之藏。能与一切衆生。大乘之法。
但不尽能受。舍利弗。以是因縁。当知諸仏。方便力故。於一仏乘。分別三説。

(裏)「譬説周正説段 偈頌 開譬」

鷄梟鸛鷲 烏鵲鳩鴿 蛇虺蝮蠍 蜈蚣蚰蜒 守宮百足 鼯狸鼯鼠 諸惡虫輩 交横馳走
屎尿臭处 不淨流溢 蜣螂諸虫 而集其上 狐狼野干 咀嚼踐踏 齧齧死屍 骨肉狼藉
由是群狗 競来搏撮 飢羸惴惴 处处食求 鬪諍擿掣 哇齟嚙吠

45 は軒丸瓦である。瓦当文様は、摩滅が激しいが、複弁八弁蓮華文と思われる。残存長 12.6cm、瓦当直径 12.6cm、瓦当厚 2.0cm。中房径は 4.5cm、弁区径 9.3cm、周縁幅 1.3cm である。中房の周囲に凹線が巡り、弁区との界線をなす。蓮弁は比較的肥厚するが中房は低く平坦で、蓮子配置は摩滅のため不明である。各蓮弁間に配される間弁は楔形を呈し、各間弁が繋がって弁区外周を巡る圈線をなす。周縁外周には深さ 6.0mm 前後の範の痕跡が見られる。丸瓦は瓦当の中心に近い位置に接合され、内外面に補填粘土を貼り付けた後にナデ調整が施される。丸瓦は凹凸両面とも無調整で、凸面には縄叩き、凹面には布目の痕跡が残る。丸瓦端面の凹面側をヘラケズリによって面取りする。非常に粗雑なつくりである。

(5) 第3面遺構出土遺物

〔池〕

池 0052

先述したように第3層をその埋土としており、3層に細分される。第3-1層に包含されていた遺物は京X期新からXI期古に属し、15世紀後葉から16世紀前葉の所産と考えられる。第3-2層

に包含されていた遺物は、京X期中に属し15世紀後葉の所産と考えられるものが主体をなす。第3-3層からは15世紀中葉の所産と考えられる遺物が出土している。

第3-1層出土遺物

46は土師器皿Nである。口径11.0cm、器高2.0cm。底部から屈曲して体部が立ち上がり、口縁部は外反して直線的に立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味に丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

47は土師器皿Sで、口径10.5cm、器高2.0cm。体部が僅かに外反しながら直線的に外方へ立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

48は瓦器羽釜で、口径24.3cm、残存器高5.0cm。口縁部のみ残存している。やや内湾しながら直線的に立ち上がり、端部は平坦に収められるが、外面側から内面側に向けて傾斜する。外面から端部にかけてヨコナデ、内面にはハケが施される。

49は信楽産の焼締陶器擂鉢である。口径30.7cm、底径13.1cm、器高12.0cm。平底から僅かに内湾しながら直線状に体部が立ち上がり、口縁部で強く外反し、口縁端部は丸く収められる。底部外面はナデが施されるが、一部に糊圧痕が残る。体部外面から口縁部外面にヨコナデが施される。内面に5条1単位の播り目を施す。

50は木製品である。残存長16.1cm、幅2.4cm、厚さ1.0cm。

第3-2層出土遺物

51は土師器皿で、残存器高2.0cm。

52は土師器皿Nで、口径10.9cm、器高2.0cm。底部から強く屈曲して体部が立ち上がり、外反しながら直線的に外方へ口縁部がのび、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡が残る。体部外面には指押さえの後ナデが施され、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

53は土師器皿Sで、口径11.2cm、器高3.0cm。やや丸みを帯びた底部から外反しながら外方へ体部が立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部に対し、体部および口縁部が僅かに肥厚する。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

54は土師器皿Sで、口径13.8cm、器高3.2cm。体部が直線的に外方へ立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。体部中ほどから口縁部にかけて肥厚する。底部外面から体部にかけて指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

55は須恵器輪花杯で、口径8.1cm、底径3.7cm、器高2.9cm。平底の底部から直線的な体部が急に立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面に糸切り痕が残り、体部外面から底部内面にロクロナデが施される。口縁端部には、密な間隔で工具による押圧で輪花が表現される。

56 は石鍋である。口径 21.2cm、残存器高 7.3cm、重量 213.6 g である。内外面ともに平滑に加工されている。

57 は砥石である。最大残存長 13.7cm、最大残存幅 7.4cm、厚さ 2.2cm。表裏両面と側面に使用の痕跡が見られる。側面は断面形が凸形になっているが、側面端部を使用した結果、中央部分が凸形に残ったものと思われる。

58 は砥石で、全長 16.9cm、幅 3.4cm、厚さは端部で 1.5cm を測るが、中央部では 1.0cm と薄く、使用によるものと考えられる。

59 は銭貨で、「元祐通宝」である。直径 2.45cm、厚さ 0.11cm、重量 1.7 g。

第 3-3 層出土遺物

60 は土師器皿 S で、口径 12.2cm、器高 3.0cm。平底の底部から内湾しながら外方へ体部が立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面にかけて指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

〔土坑〕

土坑 0045

当遺構からは京 X 期中から新に属し、15 世紀後葉の所産と考えられる遺物が主に出土している。

61 は土師器皿で、口径 7.2cm、器高 1.7cm。体部はやや外反しながら直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から底部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

62 は土師器皿 N で、口径 7.8cm、器高 1.6cm。底部中央が肥厚して体部はやや外反しながら外方へ立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

63 は土師器皿 N で、口径 10.0cm、器高 2.1cm。底部からやや強めに体部が屈曲して外方へ立ち上がり、口縁部は外反して端部が丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。京 X 期中～新に属する。

64 は土師器皿 N で、口径 10.6cm、器高 2.3cm。底部は中央部でやや肥厚し、体部はやや外反しながら外方へ立ち上がり、口縁部は肥厚して端部は丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

65 は土師器皿 N で、口径 11.0cm、器高 2.1cm。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや肥厚して端部は丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から底部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

66 は土師器皿で、口径 7.5cm、器高 1.8cm。体部は直線状に外方へ立ち上がり、口縁部は肥厚して端部はやや尖り気味に丸く収められる。底部は中央部が内面へやや突出し、底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残る。口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

67 は土師器皿で、口径 4.0cm、器高 1.6cm。底部中央が内面側にやや突出し、体部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁部が肥厚して端部は丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

68 は土師器皿で、口径 7.8cm、器高 1.6cm。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味に丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

69 は土師器皿で、口径 10.2cm、器高 2.1cm。底部はやや外反しながら外方へ立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

70 は土師器皿で、口径 10.2cm、器高 2.1cm。体部は直線的に立ち上がり、口縁部が肥厚して端部は丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面に掛けてヨコナデ、底部内面にナデが施される。

71 は土師器皿 S で、口径 11.2cm、器高 3.1cm。やや丸みを帯びる底部から直線的に体部が外方へ立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

72 は土師器皿 S で、口径 12.0cm、器高 2.9cm。やや丸みを帯びる底部からやや内湾しながら直線的に外方へ体部が立ち上がり、口縁部は肥厚して端部は丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

73 は土師器皿 S で、口径 11.6cm、器高 3.1cm。底部はやや丸みを帯び、体部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁部でやや肥厚して端部は丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面に掛けてヨコナデ、底部内面にナデが施される。

74 は土製品のミニチュア壺で、口径 1.9cm、体部径 4.0cm、底径 2.2cm、器高 3.3cm。やや丸みを帯びた底部から内湾気味に体部が立ち上がり、肩部で内傾して口縁部に達する。口縁部で強く屈曲して直線的に立ち上がり、口縁端部で外反し、端部は丸く収められる。

75 は東播系須恵器の鉢である。口径 29.2cm、底径 10.4cm、器高 10.9cm。体部は外方へ直線的に立ち上がり、口縁部で内方へ強く屈曲し、ほぼ垂直に立ち上がる。端部は丸く収められる。体部外面は指押さえの後にナデ、口縁部内外面にヨコナデ、体部内面にナデが施される。

76 は瓦器鍋で、口径 30.7cm、残存器高 15.7cm。内湾しながら緩く立ち上がる底部から、内方に屈曲して直線的に体部が立ち上がる。口縁部は、体部から外方に強く屈曲し、端部は平坦に収められる。底部外面から体部外面に掛けて指押さえの痕跡が残り、口縁部外面は指押さえの後にナデ、端部から内面に掛けてヨコナデ、体部内面はハケ、底部内面はナデが施される。直径約 13.0cm の円形に底部を欠損しており、意図的に打ち欠かれた可能性がある

(6) 拡張区遺構出土遺物

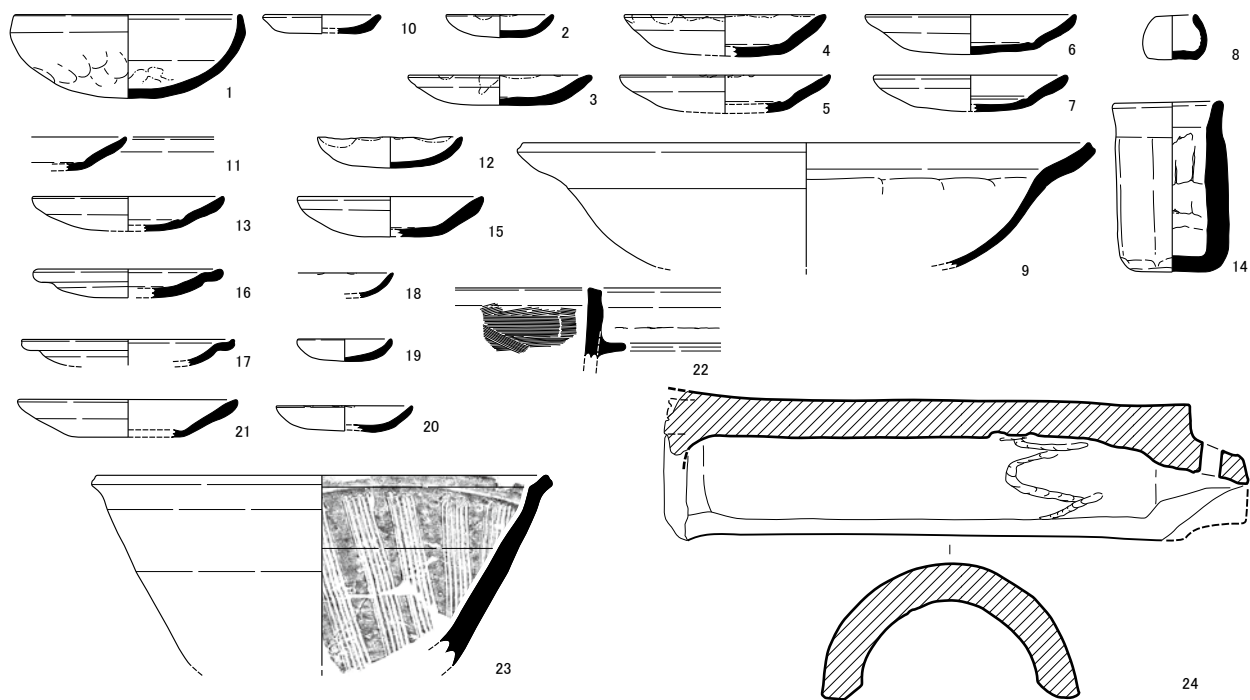
〔壕〕

壕 0051

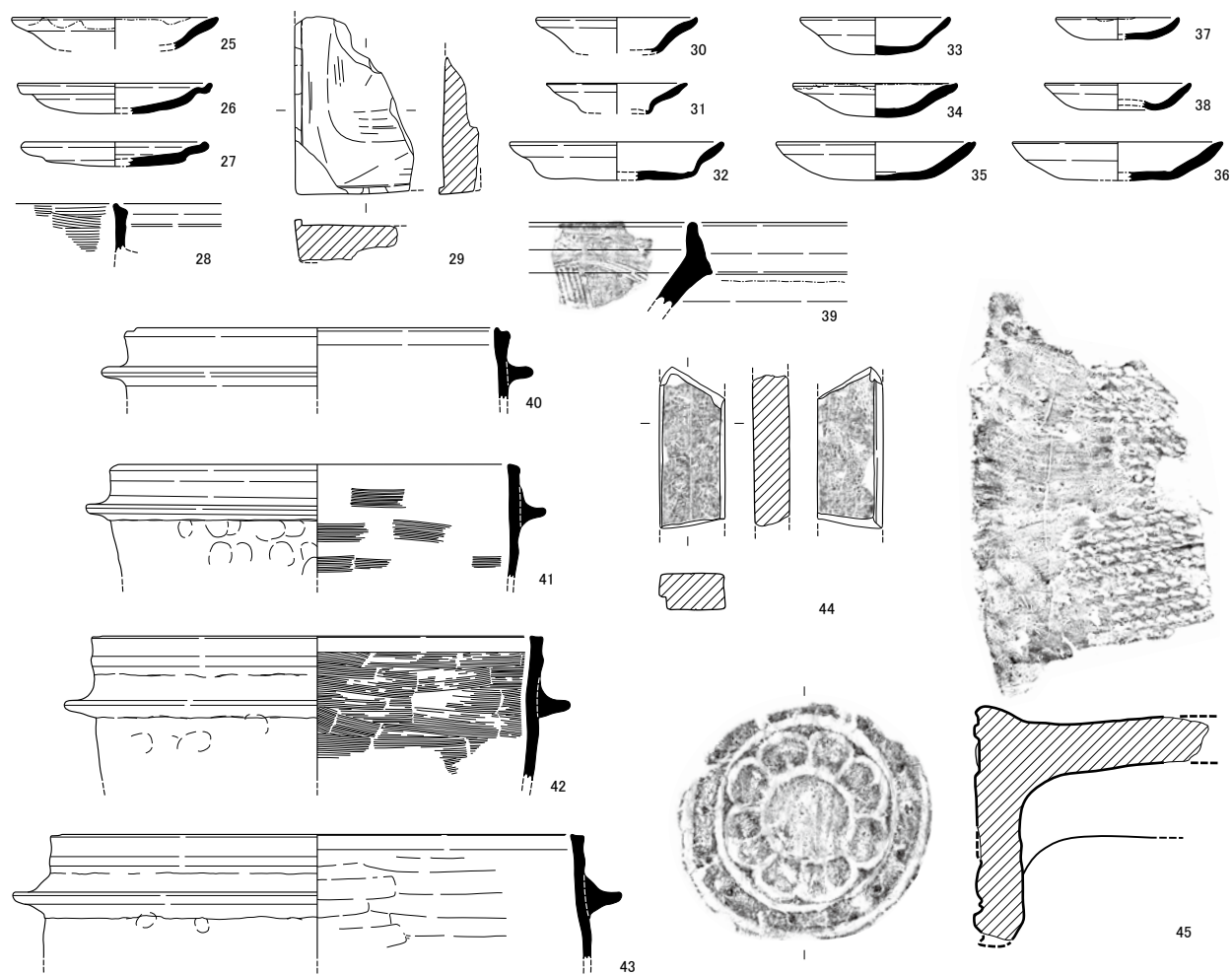
壕 0051 の遺物は京X期中に属し、15 世紀後葉の所産と考えられる。

77 は土師器皿で、口径 10.0cm、残存器高 2.3cm。やや丸みを帯びる底部から外反しながら外方へ体部が立ち上がり、口縁部はやや肥厚し、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。

78 は土師器皿で、口径 12.8cm、器高 2.3cm。体部は内湾しながら緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。底部外面から体部外面に指押さえの痕跡が残り、口縁部外面から体部内面にヨコナデ、底部内面にナデが施される。



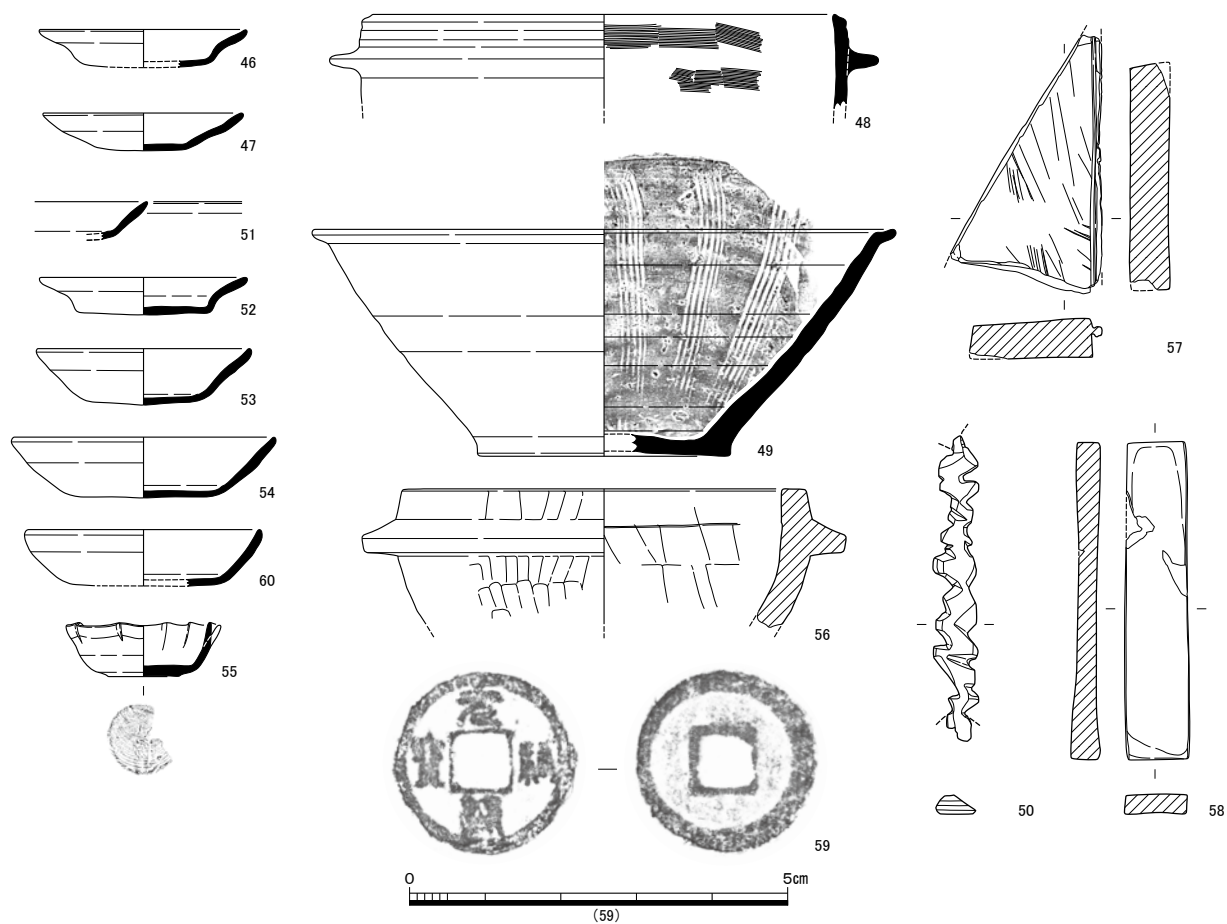
1~15 第1面遺構 16~24 第1層



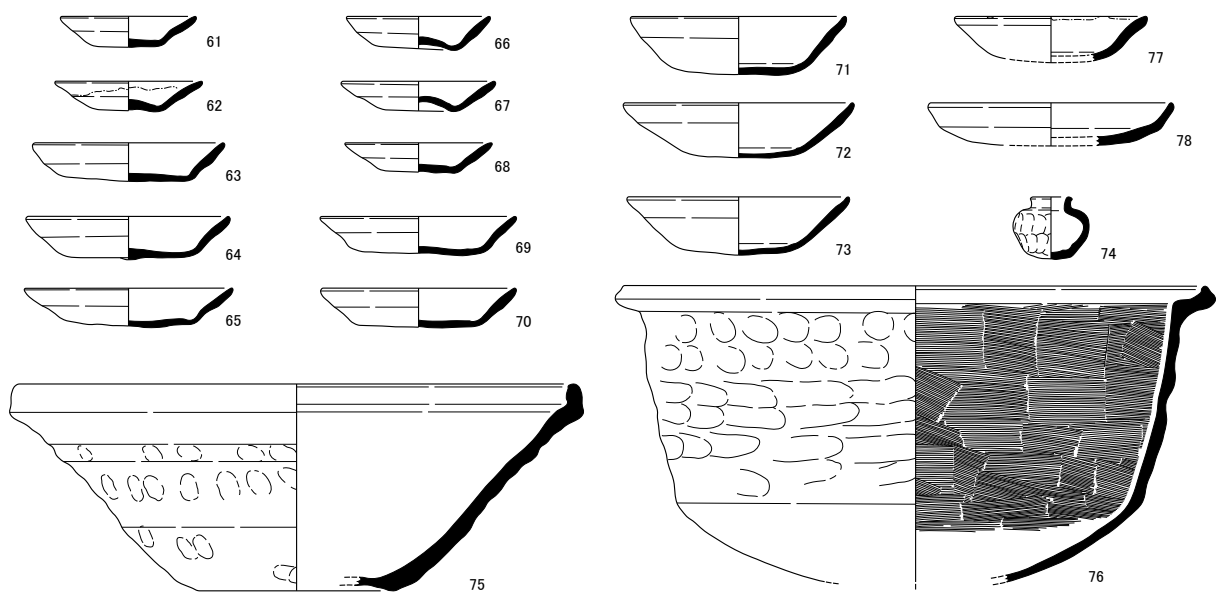
25~29 第2面遺構 30~45 第2層

図14 出土遺物1 (1:4)

0 20cm



46~50 第3-1層 50~59 第3-2層 60 第3-3層



61~76 土坑0045 77~78 壕0051

図15 出土遺物2 (1:4、1:1)

第Ⅳ章 まとめ

1 池 0052 について

池 0052 は当調査における中心遺構であり、庭園を構成する苑池と考えられる。調査区の南東部において南北長 6.3 m、東西幅 10.4 m にわたってその肩を検出したが、南および東へさらに広がることから、池の北西部を検出したものと考えられる。池の肩部では景石が配置されていた。この池の埋土から出土した遺物は 15 世紀後葉の所産と考えられるものが主体をなすことから、池 0052 は室町時代後半に機能し、廃絶したと考えられる。また、池 0052 の北辺肩部から約 0.6 m 北で検出した土坑 0045 からは 15 世紀後葉に比定される多数の土師器皿にくわえ、瓦器鍋、羽釜等が出土している。土坑 0045 からは池 0052 と同時期の遺物が出土しており、池 0052 と同様の埋土によって埋没していることから、両遺構は同時期に機能し、廃絶したと考えられ、土坑 0045 は池 0052 に付帯する施設であった可能性が考えられる。多量の土師器皿が投棄されていたことから、何らかの儀礼的行為が行われる場であった可能性が想定される。また、拡張区では基盤層から掘り込まれた、東西幅約 3.0 m、深さ 1.3 m を測る南北方向の壕を検出した。この壕は池 0052 の西肩から西へ 8.6 m の地点に東肩が位置し、15 世紀後葉の遺物が出土しており、池 0052 と同時期に機能していたものと考えられることから、庭を含めた敷地の西限を示すものと推定できる。

これらの遺構埋土から出土した遺物は何れもが 15 世紀後葉に属すると考えられるものが主体をなすことから、15 世紀後葉中に造作され、廃絶したと考えられる。

2 池 0052 の所有者について

上記の様に池 0052 が存在した期間は比較的短時間であったと考えられるが、その所有者となり得るような人物の屋敷地は、史料上では確認することはできない。

一方で、池 0052 埋土である第 3 層直上の第 2 層から出土した瓦経には『妙法蓮華経』の一説が線刻されており、寺院の存在が想起される。第 2 層には 15 世紀後葉から 16 世紀前葉の遺物が主体的に包含されており、池 0052 の埋没からさほど間をおかずに堆積したのと考えられる。また、壕 0051 は幅約 3.0 m、深さ 1.3 m で、左京五条三坊五町跡における 2013 年の発掘調査で検出された溝 305、同じく 2013 年に左京北辺二坊八町跡で実施された発掘調査で検出された溝 2001、2040 に近い規模を有する。五条三坊五町跡で検出された溝 305 は幅 3.0 m、深さ 1.1 m を測り、御影堂新善光寺に属する堀状遺構で、16 世紀前半から中頃のものと考えられる。左京北辺二坊八町跡で検出された溝 2001 は幅 2.1 m、深さ 0.9 m、溝 2040 は幅 3.5 m、深さ 1.1 m を測り、15 世紀後半以降に埋没していると考えられ、讃州寺陣に関連する遺構とされる。これらの堀状遺構や溝は寺院防衛を目的とした、所謂「構」であったと考えられる。当調査で検出された壕 0051 は御影堂新善光寺のものとは時期は異なるがほぼ同規模であり、讃州寺の溝とは同時期と考えられ規模もほぼ同じである。

これらのことから、池 0052 は寺院に伴うもので、壕 0051 はその構とも考えられる。

『二水記』 享禄元（1528）年二月八日条には

午時詣因幡堂葉師、此次六条本国寺之辺歴覧、戦場縦横、堂塔・在家等一円無之、言語道断之跡也、所見及破滅在々所々大方書之、

壬生地蔵堂 悉以壊破之、只本堂・南門等許残了、抑此堂草創已後、未及回禄歟、古所尤可嘆々々、于恒宿祢宿所已下悉以無一寸之竹木、只広野之跡也、

万寿寺 是又悉以破滅、四面築地無其面影、竹木不残寸苗、言語道断之式也、但法塔只一残了、如野中人宿也、

長講堂 是又一円滅亡了、歎而有餘事也、院庁宿所悉以壊之、此庭当時無双之古木石也、拳世令見物之庭也、可惜々々、不便之至也、

六条金仏 同破滅、但為鑄仏之間、於三尊^{大日・尺迦・阿彌陀、各座像}、者無恙也、

右分、予存知之分量許也、此外五条天神、所々八幡、時衆道場等数多滅亡云々、今度之跡匪啻壊堂社、摧仏像焼之云々、未曾有之事也、老翁云、応仁大乱焼仏云々、去年丁亥、応仁同支干也、可恐々々、

とある。万寿寺は左京六条四坊一・二町にあったとされ、長講堂は左京六条二坊十三町にあった六条殿内の持仏堂、六条金仏は現在河原町通六条下る本塩竈町にある延寿寺で、天正 19（1591）年に現在地へ移転する以前は調査地北東にあたる上金仏町にあったとされる。『中昔京師地図』では「金仏延寿寺」として左京六条三坊三・四町に描かれている。これらの諸寺は何れも調査地に所在したものではないが、周辺には複数の寺院が存在していたことがわかる。このような周辺の状況と、今回の池 0052、壕 0051 の検出から、記録に現れていない寺院が調査地および周辺に存在したという想定も可能かと思われる。

また、第Ⅱ章で記したように、調査地には『中昔京師地図』では「判官池」が描かれている。『山州名跡志』は、泉水町の人家の後ろに池跡があり、源氏堀川館にあった判官殿池であるという説を紹介したうえで、当該地は後白河法皇の六条殿の西限にあたるとする。これらから、少なくとも 18 世紀初頭の時点で、調査地周辺にかつて池が存在し、それが源氏堀川館のものであったとの認識がなされていたことを窺うことができる。今調査において池 0052 を検出したことにより、『山州名跡志』、『中昔京師地図』に記される「判官池」が実在していたことが明らかになったと考えられる。一方で、この「判官池」が源氏堀川館に伴う池であるならば、12 世紀後半には成立していた筈であるが、今回検出した池 0052 の成立時期は 15 世紀後葉であることから、上記史料に記載される「判官池」（＝池 0052）が源氏堀川館に伴うものとは考え難い。また、源氏堀川館については、『中古京師内外地図』にも見えるように、近世の段階で左京六条二坊十二町にあったと認識されていたようであるが、この位置比定については先学により疑問が呈されている。源氏とは無関係の池に対して「判官池」という、源氏に所縁のある呼称を用いているのは、当時の京の人々によって、左京六条二坊十二町とその周辺地域は源氏の本拠であると強く意識されていたことを示唆するものと考えられる。

3 遺構の変遷

調査地における基盤層はφ 10cm ～ 15cm の礫を多量に含む 7.5Y5/1 灰色粗粒砂からなり、当該層からは遺物は出土していない。周辺の調査においても洪水堆積による礫層が基盤となっていることが確認されており、弥生時代後期から古墳時代前期までの間に周辺広域の基盤層形成と地形の安定化が起こったと考えられている。本調査地における 9 世紀の土地利用のあり方を示す記録は認められず、『平安遺文』の記述によって 11 世紀前半に保と刀禰の存在が確認されることから一定の整備はされていたと考えられるが、当該期の遺構は検出されていないため、詳細は不明である。過去の調査において、十二町や十四町では 11 世紀前半に整地土が敷設され、本格的な土地利用が開始されることが明らかになっている。この整地は広域に対して実施されたと想定されているが、当調査地においては同様の整地土は確認できなかった。これ以降、池 0052 が作られる 15 世紀後葉までは遺構が検出されず、遺物の出土も僅少であり、当調査地における土地利用の痕跡は認められない。

池 0052、土坑 0045、壕 0051 は室町時代後半に廃絶したと考えられるが、池 0052 埋土である第 3 層は 3 層に細分される。中間層であり、最も層厚が厚い第 3-2 層にはブロック土が含まれず、堆積層中に斜交層理が見られることから、当該層は水流により運ばれた土砂により形成されたと考えられる。また、最上層である第 3-1 層は、暗灰色を呈する極細粒砂～シルトによって構成されており、強い粘性を有することから、池 0052 が第 3-2 層によって埋没した後は湿地あるいは沼地状態であったものと考えられる。第 3 層直上に堆積する第 2 層には 15 世紀後葉から 16 世紀前葉に比定されるものを主体とする遺物が包含されることから、池 0052 の埋没後、さほど時間を空けることなく第 2 層が堆積したと考えられる。しかし、第 2 層上面では不定形な土坑状の遺構を数基検出したのみで、居住域として土地利用がなされた可能性は低い。第 2 層直上に堆積する第 1 層からは 16 世紀後葉から 17 世紀前葉のものと考えられる遺物が主体となって出土しており、当層上面で検出した遺構からは 17 世紀中葉から 18 世紀前葉に比定される遺物が出土している。しかし、これらの遺構も不定形な平面形状を呈する土坑、溝状遺構が主であり、ピットを数基検出したものの、建物を想定可能なほどのまとまりは認められず、江戸時代中頃に至っても調査地は居住域としての利用がなされていなかったと推定される。

これらのことから、15 世紀後葉に池 0052 をはじめ土坑 0045、壕 0051 が成立し、廃絶した後は 17 世紀中葉まで当調査地における居住域としての土地利用は非常に希薄であったと考えられる。平成 29 年度に十四町で実施された調査および平成 30 年度に十二町で実施された調査（図 7）においても 15 世紀後半から 17 世紀中葉までの遺構が減少する傾向が確認されており、周辺全体の傾向として認められる現象とされているが、今回の当該期における遺構の状況はそれを補強するものと考えられる。

今回の調査では、池 0052 とそれに伴うと考えられる壕 0051 が検出されたことによって、従来詳らかでなかった室町時代後半での調査地における土地利用のあり方を知る資料を得られた。

参考文献

- 水谷明子 「平安京左京五条三坊五町・烏丸綾小路遺跡」 2013 年
- 持田透 「平安京左京北辺二坊八町跡 - 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -」『イビソク京都市内遺跡調査報告』第4輯 2013 年
- 魚澄惣五郎 「六條左女牛八幡宮に就いて」『歴史と地理』8-6 1920 年
- 海老名尚・福田豊彦 「(資料紹介)『田中讓氏旧蔵典籍古文書』「六条八幡宮造営注文」について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第45集 1992 年
- 下中邦彦 「京都市の地名」『日本歴史地名体系第二七巻』平凡社 1979 年
- 角田文衛 『平安京提要』角川書店 1994 年

表3 遺物観察表

掲載No	器種	器形	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
1	瓦質土器	鉢	1	第1面 土坑 0003	11.8	4.4			N7/0 灰色	内外面被熟痕有
2	土師器	皿	1	第1面 土坑 0007	5.6	1.2			10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁部煤付着
3	土師器	皿	1	第1面 土坑 0007	9.6	1.6			10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁部煤付着
4	土師器	皿	1	第1面 土坑 0011	10.6	2.2			10YR8/3 浅黄橙色	口縁部煤付着
5	土師器	皿	1	第1面 土坑 0011	11.0	2.0			7.5YR8/4 浅黄橙色	口縁部煤付着
6	土師器	皿	1	第1面 土坑 0011	11.0	2.1			5YR7/6 橙色	
7	土師器	皿	1	第1面 土坑 0014	10.0	(1.9)			7.5YR8/4 浅黄橙色	
8	土製品	小壺	1	第1面 土坑 0014	2.0	2.4	2.6		10YR7/2 にぶい黄橙色	つぼつぼ
9	土師器	鍋	1	第1面 土坑 0014	29.8	(6.6)			(外) 10YR3/2 黒褐色 (内) 10YR7/4 にぶい黄橙色	外面煤付着
10	土師器	皿	1	第1面 ビット 0016	6.0	1.0			10YR8/3 浅黄橙色	
11	土師器	皿	1	第1面 ビット 0016		(1.8)			10YR8/3 浅黄橙色	
12	土師器	皿	1	第1面 ビット 0017	7.5	1.6			10YR8/3 浅黄橙色	口縁部煤付着
13	土師器	皿	1	第1面 ビット 0017	10.0	1.8			7.5YR7/4 にぶい橙色	
14	土師器	焼塩壺	1	第1面 溝 0009	5.5	9.0	3.8		5YR7/6 橙色	
15	土師器	皿	1	第1面 溝 0024	9.5	(2.1)			7.5YR8/3 浅黄橙色	
16	土師器	皿	1	第1層	9.6	(1.5)			10YR7/3 にぶい黄橙色	
17	土師器	皿	1	第1層	11.1	(1.4)			10YR6/3 にぶい黄橙色	
18	土師器	皿	1	第1層		(1.3)			10YR7/2 にぶい黄橙色	口縁部煤付着
19	土師器	皿	1	第1層	4.8	1.2			10YR7/3 にぶい黄橙色	
20	土師器	皿	1	第1層	7.1	1.4			10YR7/2 にぶい黄橙色	口縁部煤付着
21	土師器	皿	1	第1層	11.5	2.0			10YR8/2 灰白色	
22	瓦器	羽釜	1	第1層		(3.7)			N3/0 暗灰色	
23	焼締陶器	播鉢	1	第1層	23.6	(10.0)			2.5YR6/6 橙色	
24	瓦	軒丸瓦	1	第1層	長 (30.7)	幅 (14.0)	高 (7.9)	1.9	N3/0 暗灰色	瓦当無し
25	土師器	皿	1	第1面 土坑 0028	10.9	(1.7)			7.5YR7/3 にぶい橙色	口縁部煤付着
26	土師器	皿	1	第2面 土坑 0029	10.2	(1.6)			10YR7/3 にぶい黄橙色	
27	土師器	皿	1	第2面 土坑 0029	9.6	1.3			10YR7/3 にぶい黄橙色	
28	瓦器	羽釜	1	第2面 土坑 0029		(2.6)			N3/0 暗灰色	
29	石製品	硯	1	第2面 土坑 0030	長 (9.5)	幅 (6.4)		2.2		重量 169.7g
30	土師器	皿	1	第2層	8.5	(1.9)			10YR7/3 にぶい黄橙色	
31	土師器	皿	1	第2層	7.4	(1.7)			10YR7/2 にぶい黄橙色	
32	土師器	皿	1	第2層	11.1	(2.1)			7.5YR7/4 にぶい橙色	
33	土師器	皿	1	第2層	8.0	2.0			7.5YR7/4 にぶい橙色	
34	土師器	皿	1	第2層	8.7	1.8			7.5YR7/3 にぶい橙色	口縁部煤付着
35	土師器	皿	1	第2層	10.4	2.1			10YR8/1 灰白色	
36	土師器	皿	1	第2層	11.2	(2.1)			7.5YR8/3 浅黄橙色	
37	土師器	皿	1	第2層	6.5	1.2			10YR8/4 浅黄橙色	
38	土師器	皿	1	第2層	7.8	1.4			10YR8/2 灰白色	

掲載No	器種	器形	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
39	焼締陶器	擂鉢	1	第2層		(4.5)			10YR5/1 褐灰色	
40	瓦器	羽釜	1	第2層	19.0	(3.8)			2.5Y7/1 灰白色	
41	瓦器	羽釜	1	第2層	20.9	(6.0)			N4/0 灰色	
42	瓦器	鍋	1	第2層	22.8	(7.7)			2.5Y6/1 黄灰色	
43	瓦器	羽釜	1	第2層	27.1	(6.7)			N4/0 灰色	
44	瓦経		1	第2層	長 (8.6)	幅 3.5		2.0	2.5Y8/1 灰白色	
45	瓦	軒丸瓦	1	第2層	長 (12.6)	瓦当径 12.6			N4/0 灰色	
46	土師器	皿	1	第3-1層	11.0	2.0			10YR8/3 浅黄橙色	
47	土師器	皿	1	第3-1層	10.5	2.0			2.5Y7/2 灰黄色	
48	瓦器	羽釜	1	第3-1層	24.3	(5.0)			N4/0 灰色	
49	焼締陶器	擂鉢	1	第3-1層	30.7	12.0	13.1		2.5YR6/4 にぶい橙色	
50	木製品		1	第2層	長 (16.1)	幅 2.4		1.0		用途不明
51	土師器	皿	1	第3-2層		(2.0)			10YR7/2 にぶい黄橙色	
52	土師器	皿	1	第3-2層	10.8	2.0			7.5YR6/4 にぶい橙色	
53	土師器	皿	1	第3-2層	11.2	3.0			2.5Y8/1 灰白色	
54	土師器	皿	1	第3-2層	13.8	3.2			10YR8/2 灰白色	
55	須恵器	坏	1	第3-2層	8.1	2.9	3.7		N7/0 灰白色	
56	石製品	石鍋	1	第3-2層	21.2	(7.3)				重量 2136g
57	石製品	砥石	1	第3-2層	長 (13.7)	幅 (8.0)		2.2		重量 244.4g
58	石製品	砥石	1	第3-2層	長 16.9	幅 3.4		1.5		重量 134.1g
59	銭貨	元祐通寶か	1	第3-2層	長 2.45	幅 2.45		0.11		重量 1.7g
60	土師器	皿	1	第3-3層	12.2	3.0			10YR8/2 灰白色	
61	土師器	皿	1	第3面 土坑 0045	7.2	1.7			10YR8/3 浅黄橙色	
62	土師器	皿	1	第3面 土坑 0045	7.8	1.6			7.5YR8/4 浅黄橙色	口縁部煤付着
63	土師器	皿	1	第3面 土坑 0045	10.0	2.1			10YR8/4 浅黄橙色	
64	土師器	皿	1	第3面 土坑 0045	10.6	2.3			10YR8/2 灰白色	
65	土師器	皿	1	第3面 土坑 0045	11.0	2.1			10YR8/3 浅黄橙色	
66	土師器	皿	1	第3面 土坑 0045	7.5	1.8			10YR7/2 にぶい黄橙色	
67	土師器	皿	1	第3面 土坑 0045	4.0	1.6			10YR8/3 浅黄橙色	
68	土師器	皿	1	第3面 土坑 0045	7.8	1.6			10YR8/3 浅黄橙色	
69	土師器	皿	1	第3面 土坑 0045	10.2	2.1			10YR8/2 灰白色	
70	土師器	皿	1	第3面 土坑 0045	10.2	2.1			10YR8/3 浅黄橙色	
71	土師器	皿	1	第3面 土坑 0045	11.2	3.1			2.5Y8/1 灰白色	
72	土師器	皿	1	第3面 土坑 0045	12.0	2.9			2.5Y8/1 灰白色	
73	土師器	皿	1	第3面 土坑 0045	11.6	3.1			10YR8/2 灰白色	
74	土製品	ミニチュア壺	1	第3面 土坑 0045	1.9	3.3			N8/0 灰白色	
75	須恵器	鉢	1	第3面 土坑 0045	29.2	10.9	10.4		2.5Y7/2 灰黄色	
76	瓦器	鍋	1	第3面 土坑 0045	30.7	(15.7)			2.5Y7/1 灰白色	
77	土師器	皿	拡張	第3面 壕 0051	10.0	(2.3)			10YR8/4 浅黄橙色	
78	土師器	皿	拡張	第3面 壕 0051	12.8	2.3			10YR8/4 浅黄橙色	

附章 自然科学分析

池0052出土岩石薄片の偏光顕微鏡による観察結果報告

藤原 卓（公益財団法人 益富地学会館）

1 分析試料

出土岩石（平安京左京六条二坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡発掘調査出土岩石）

試料は池0052肩部に配置されていた景石1点である。

2 岩石名

花崗閃緑斑岩

3 肉眼的特長

全体的に暗灰色で、長径数mm程度の白色の斑晶が目立つ岩石である。

4 偏光顕微鏡による観察（図16、17）

斑状組織をなす。

斑晶は主に数mm～1mm程度の自形の斜長石と、1mm～0.5mm程度の自形の石英、および少量の有色鉱物からなる。

石基は完晶質で、粒度が0.1mm程度のモザイク状をなす石英と斜長石と細粒の有色鉱物からなる。斑晶の斜長石は白濁しているが、自形をなし、集片双晶が顕著である。斑晶の石英は透明で、自形をなすが、全体的に融食作用を受けて丸くなっている。有色鉱物は、黒雲母や角閃石類であったと推察できるが、緑泥石類や緑簾石に変質して、元の鉱物は残っていない。

石基の斜長石は白濁しているが、石英は透明である。副成分鉱物として、褐簾石、ジルコン、燐灰石、不透明鉱物が認められる。

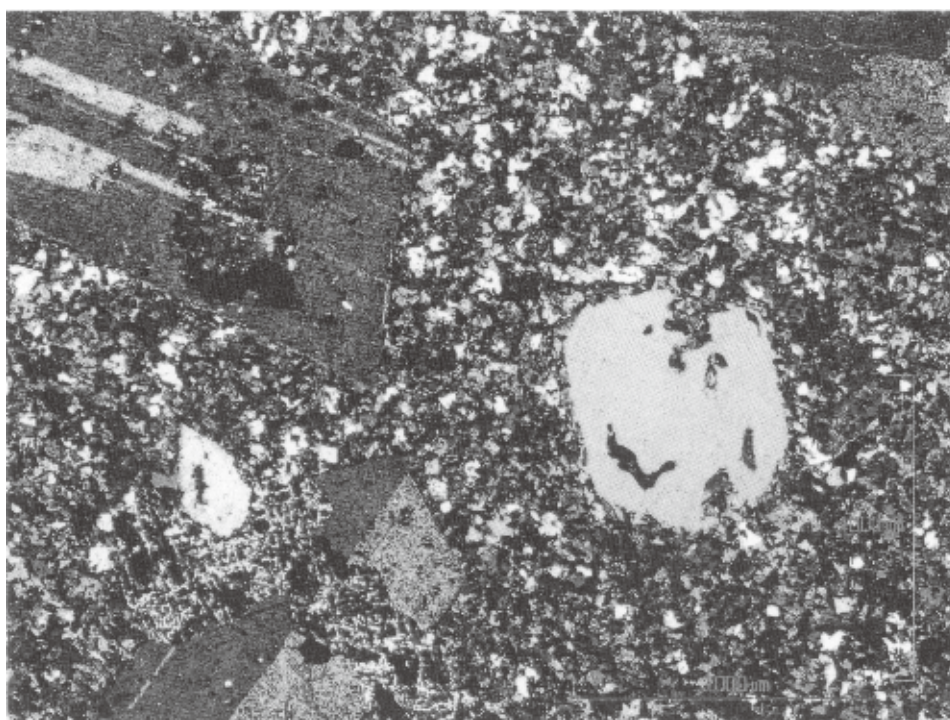
斑晶鉱物と石基の構造から、花崗閃緑岩質の斑岩（半深成岩・脈岩）と考えられる。

5 考察

本岩は、肉眼鑑定においては、京都府付近では亀岡市・園部町の西部から大阪府・兵庫県東部に分布する、いわゆる“有馬層群”（中生代白亜紀後期の火成岩類）の流紋岩類と、京都市周辺に分布する丹波帯に伴う（特に高野川上流域によく見られる）花崗岩～花崗閃緑岩質の斑岩質との判別が困難であった。しかし、薄片の偏光顕微鏡観察によって、斑晶の構成鉱物（斜長石と石英でカリ長石が認められない）及び形態（斑晶が自形結晶で、破片状の結晶片が見られない）や、石基の構造（モザイク状で完晶質である）から、花崗閃緑斑岩とした。



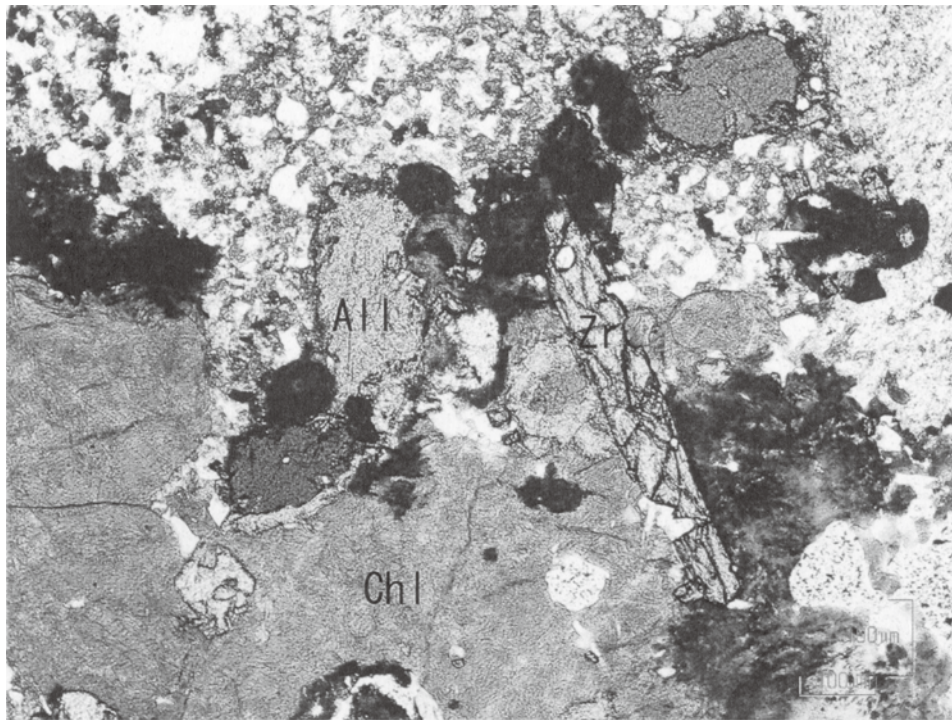
単ニコル



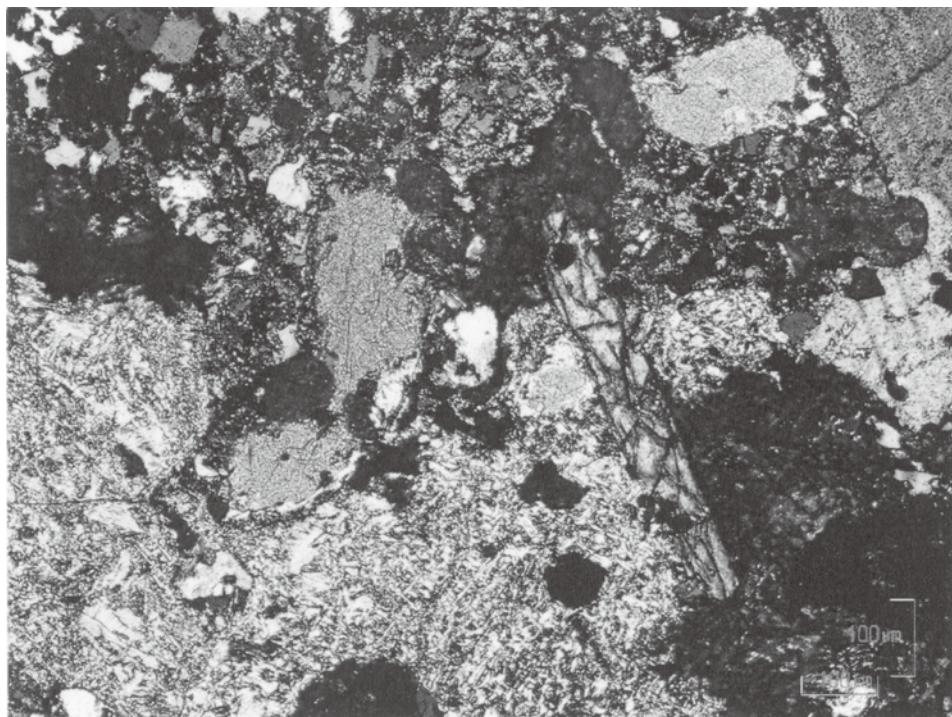
クロスニコル

Qtz:石英 Pl:斜長石 Chl:緑泥石類

図16 偏光顕微鏡写真 1



単ニコル



クロスニコル

All: 褐簾石 Zr: ジルコン Chl: 緑泥石類

褐簾石は、単ニコルで多色性が顕著で、クロスニコルでは高い干渉色を示す。
ジルコンは、クロスニコルでは高い干渉色を示し、直消光である。

図17 偏光顕微鏡写真2

図 版



1. 調査地全景（上が北）



2. 第1面完掘状況（西から）



1. 第2面完掘状況（西から）



2. 第3面完掘状況（西から）



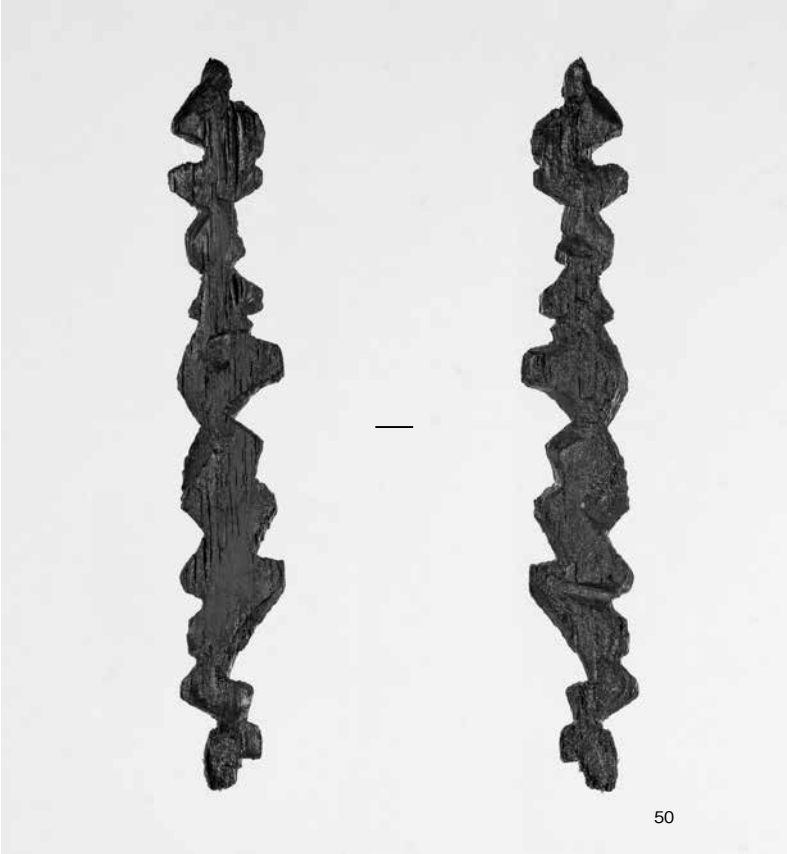
1. 池0052景石検出状況（北東から）



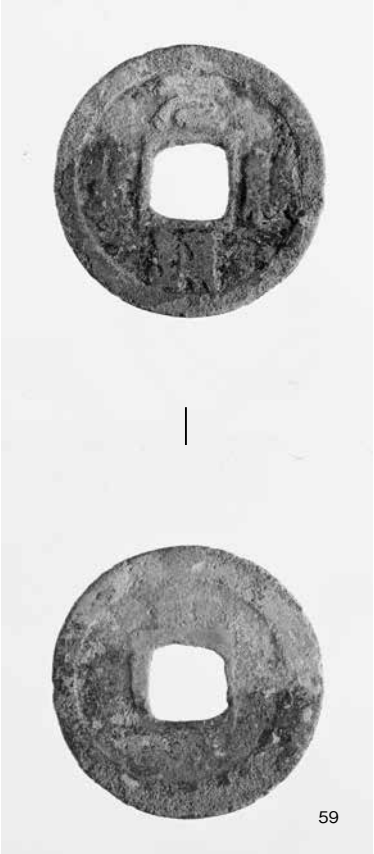
2. 拡張区壕0051完掘状況（北から）



1. 第2層出土瓦經



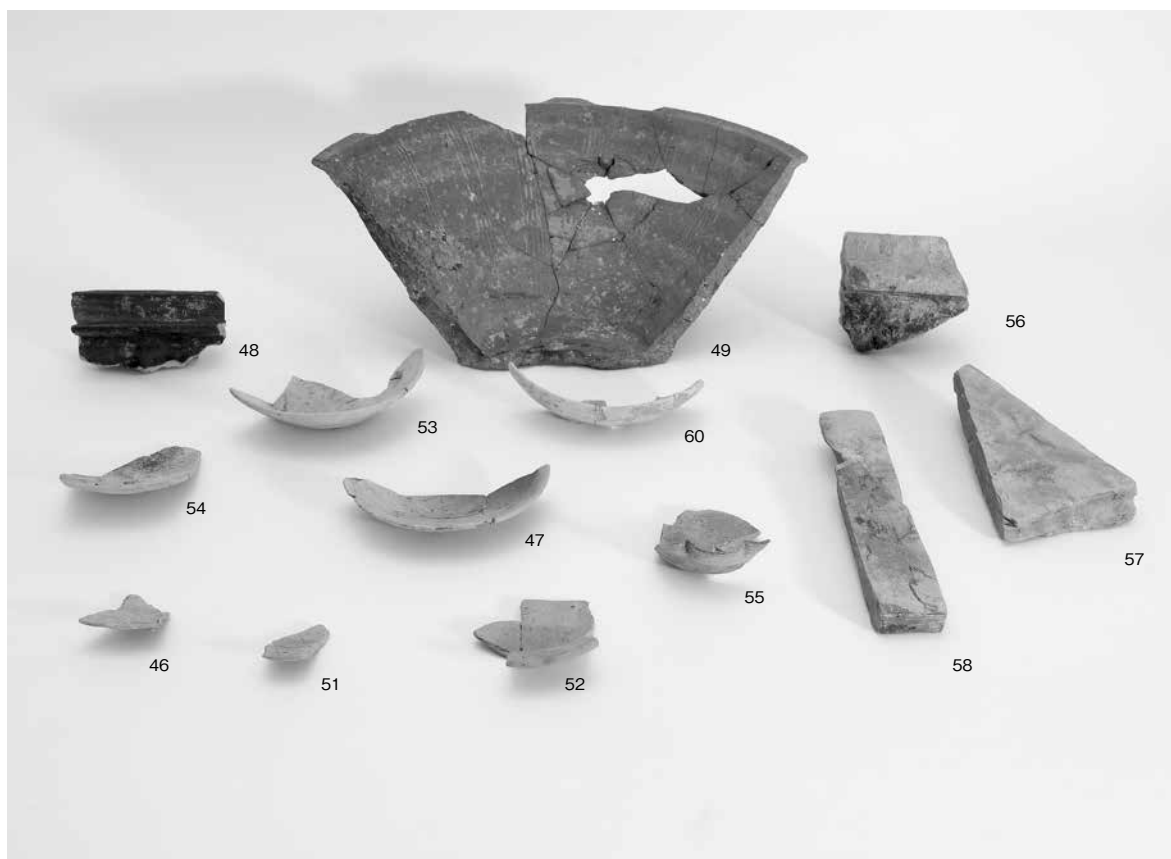
2. 池0052出土木製品



3. 池0052出土錢貨



1. 土坑0045出土遺物



2. 池0052出土遺物

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうろくじょうにほうじゅういっちょうあと・からすまあやのこうじいせきはつつちょうさほうこくしょ							
書名	平安京左京六条二坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	辰巳陽一 藤原 卓 野地ますみ							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2019年10月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょうろく 平安京左京六 じょうにほうじゅういっちょうあと 条二坊十一町跡 からすまあやのこうじいせき 烏丸綾小路遺跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 さめがいせんすいちょう 醒ヶ井泉水町 ばんち 134番地2・5・6 た びつ その他10筆	26100	1	34度 59分 44.1秒	135度 45分 10.8秒	2019年 7月1日 ～ 2019年 8月30日	315㎡	宿泊施設 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安京左京六条二坊十一町跡 烏丸綾小路遺跡	都城・都市遺跡	室町時代		苑池 壕 土坑		土師器 須恵器 瓦器 土製品 木製品 石製品 焼締陶器 瓦		・室町時代後期の池を検出し、当該機における六条二坊の土地利用のあり方の一端が判明した。 ・室町時代末期から江戸時代中期における、調査地周辺の土地利用の変遷について、周辺調査から得られている成果を補強する成果を得た。
		江戸時代		溝 土坑 柱穴		土師器 瓦質土器 陶磁器 染付 瓦		

平安京左京六条二坊十一町跡 烏丸綾小路遺跡調査報告書

発行日 2019年10月31日

株式会社 文化財サービス
編集 〒612-8372 京都市伏見区北端町58
TEL 075-611-5800

三星商事印刷株式会社
印刷 〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る
TEL 075-256-0961